

かにあった。一行さんと一緒にならどんな世界にだって行ける、戻れなくてもかまわない、と。実現まであと一歩のところまで来ていたから、エンジニアとしても引き下がりたくなかつた。だけど、君の言葉を思い出して、自問した。ヤタはどうなるんだと。君はどう思うだろうかと。……君を裏切つていいのかと

話すときいつも目線を合わせてくれなかつた堅書君の目が、切れ長の理知的な瞳が、今日だけはまっすぐにこつちに向けられている。

「それに、先生を失つてあれほどショックだつたのに、僕はあまりに周りが見えていなかつた。君やヤタ、学科のみんな、千古さん、センターの人達、実家の母——残された人達に僕と同じ苦しみを与えることになる。『負の連鎖』だ。これも君の言葉だつたな」

「そういえば、そんなことを言つたような気がする。

「——だから、計算した。文献を調べた。実験した。過去のデータについても解析を全部やり直した。その過程でのパラメータが、現実志向ベクトルが見つかつた」

「ああ、そうだつたんだ。

てつきり堅書君、ヤタもあたしもみんな置いて、脳死も厭わず先生に会いに行くつもりなんだつて思つてた。そのための研究に没頭してゐるんだつて。もしかしたら一行さん

私は再び三和土にしゃがみこんで、ヤタのおなかをそつと撫でながら堅書君の話に耳を傾ける。

毛並みと体温を手のひらに感じるうちに、さつきまでの荒ぶつた気持ちが少しづつ落ちしていく。必死こいてた自分が、今さらながら少し恥ずかしくなつてくる。

「だけど、なんていうかな……。『先生』としか呼びようがないんだ。その人の記憶を呼び起こすことに、すぐ『先生』と言いたくなる」

「ふうん……。よくわかんないけど、大切な人だつたんだろうなつてことはわかるよ。」

「ああ。彼女と出会えたのも先生のおかげだ。本当に、いろいろなことを教えてくれたんだ。何もできなかつた僕に、やればできるということを教えてくれた。周囲に流されっぱかりだつた僕を成長させてくれた。大切な人を守るための強さをくれた。今でも苦しいとき、悩んでいるとき、僕は先生の言葉を思い出す」

「——だけど先生は、僕の前から消えてしまつたんだ。いや、僕が消してしまつた。こ

## エキセントリシティ

本作品は映画『HELLO WORLD』のスピンオフアニメ『ANOTHER WORLD』の二次創作です。

エキセントリシティ

WORLD

WORLD

エキセントリシティ

36

「話がどんどん意味不明になつていくけど、その口調は真剣そのものだ。」

「あの時はそうするしかなかつたと頭では理解できても、それがずっと心の重しになつていた。なぜ先生は消えなければならなかつたのか。消えるのが僕ではいけなかつたのか。あんな形で先生を踏み台にして、僕だけが幸せになつてしまつていいのだろうか、そう思つていた」

あたしに説明するというより、なんだか自分に言い聞かせてるみたいに聞こえる。何か、辛い思い出があるらしいことだけは伝わつてきた。そして堅書君がそれに対しても、確かにいるのだ、と。その情況証拠を僕は掴んだと思っている。だから僕はそれを確かめたい。もう一度先生に会いたい。もう一度だけでいい。会つてお礼を言いたい。もしかすると生きているうちには無理かもしれないけど、それでも僕は、先生のいる世界へ思つてしまつ気持ち。

「だけど、二回生の時にわかつたんだ。先生は消えたわけじやなかつた。どこかの世界に、確かにいるのだ、と。その情況証拠を僕は掴んだと思っている。だから僕はそれを確かめたい。もう一度先生に会いたい。もう一度だけでいい。会つてお礼を言いたい。もしかすると生きているうちには無理かもしれないけど、それでも僕は、先生のいる世界へ思つてしまつ気持ち。

エキセントリシティ

a

1101111年九月一〇〇日 初版発行  
1101111五年一月一八日 修正版発行a 発行者  
印刷所  
Twitter @a223324094

https://www.pixiv.net/users/59321047

© a 2023

「あたしが……？」  
 「いつだつたか、猫を飼うつてことの責任について、話してくれたことがあつたね。勝手に倒れられたらヤタはどうなるんだって」「…………うん」

「あの話がずっと心に引っかかつてたんだ。だから、一行さんから離心率の話を聞いたとき、真っ先に思い浮かんだのはあの言葉だった」

そう語る堅書君の顔つきが、今までにないくらい穏やかなのにふと気づく。まるで憑き物が落ちたみたいだ。どこか思い詰めたような横顔だけをずっと見つめ続けてきたから、初めて見るその表情にざきりとしてしまう。

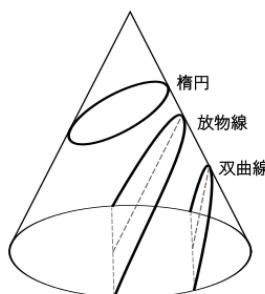
そして思う。その穏やかな眼差しの先に広がる世界は、あたしのものじゃない。一行さんのものだ。わかつてる。だからあたしは、緩衝地帯までしか立ち入らない。調子に乗つたりしない。

だけど今、あたしは、緩衝地帯の最前線に立つてゐる。行ける範囲の一一番端っこ、手を伸ばせばもう少しでその先に届きそうな、ぎりぎりの地点に。「白状する。この世界に戻れないと言われたとき、それでも行きたいという気持ちは確

(了)

怪訝な顔をしてるあたしに気づいて、堅書君がノートを取り出した。円錐の図をさらさらと描いていく。

「円錐を平面で切るとする。その切り口は、切り方によつて橍円にも放物線にも双曲線にもなるよね。今まで僕達が片道切符だと想い込んでいたのは、こんな風に、双曲線になるような切り方しか考えてなかつたからだ。でも、切り方を変えれば橍円になる。つまり僕達は、行つて帰つてくることができる」



ボールペンの先がくるりと輪を描く。

「それに気づかせてくれたのは、君なんだ」

界に手を伸ばしたい。その可能性に賭けようと決めた

先生にもう一度会うことで堅書君が過去の呪縛から解き放たれるのなら、あたしは全力でそれを応援したいって思つた。堅書君は優しいから、たとえこの先どれだけ幸せな人生を送るとも、心のどこかで先生に対する罪悪感を持ち続けてしまうんだろうな。サバイバーズ・ギルトは解消されなきやいけない。そのためだつて言うのなら、学生生活のすべてを犠牲にしようとする堅書君の奇行も、少し許せる気がした。堅書君は、幸せにならなきやいけない。

「そつか。堅書君はどうしても先生に会いたいんだね。うん、応援する。何かできるこ

とがあれば、手伝うよ」

「……ありがとう。今日もこんなに助けてもらつて、感謝している」

堅書君は、思いを吐き出したせいか、どこかほつとしてるようにも見えた。

「でさ、先生に会うことと、堅書君の猛勉強と、どんな関係があんの?」

「うーん。どう説明すればいいかな。……僕は、京都歴史記録事業センターの職員にな

## 第一 章 2032年 夏

(一)

**eccentricity [eksəntri'siti, -sen-]**

1 [U] (言動・性格・服装などの) 異常、風変わり (なこと) 《in, of》。異常さ、変わり具合  
1 a [C] [しばしばties] 常軌を逸した行為、奇行、奇癖

2 [C] 《機械》偏心 (距離)。《数学》離心率

(小学館 プログレッシブ英和中辞典 第五版)

「みんなながらあたしはほんやり眺めている。ハデ目のメイクにショートヘアの子と、雰囲気が小動物系でぱつんボブの子。心の中で勝手にハデ子と小動物ちゃんって呼んでる。思つたよりこいつら口が悪いなー。さっきまで一緒になつてバカ騒ぎしてたけど、なんかちょっと醒めた。まあ変に善人ぶるよりは正直でいいのかもだけどさ。

「まあ……。用事あつたのかもしねえしさ。明日、課題一緒にやろうつて誘つてみようぜ」

「だよな、急だつたし……。堅書君、前から実験一緒だつたけど、悪いやつじやないよ。コミュ障なだけで」

変なTシャツの男子と眼鏡の男子は、ヒートアップする女子組をなだめにかかつて。このまま女子が結束しちゃって、女子と男子が断絶しちゃうのを恐れてるんだろうな。

こっちもまあ、女子の悪口に迎合するよりは全然マシ。でも変T君も眼鏡君も完全にやり方間違つてし、すっかりハデ子と小動物ちゃんに気圧けおされてる。

この空気がデフォになつたら面倒だなー、と思いながら塩キヤベツを口に放り込む。頼んだ生レモンサワーは全然来ない。

「千古さんの講義を受けてるなら、アルタラセンターと言つたほうが通じるかな」「あ、講義で聞いた！ 量子記憶装置とか、クロニクル京都とかでしょ」

「そう、それ。歴史記録事業センターの中でも特に量子記憶装置の管制を専門に司る部門。そこを目指している」

アルタラセンター。確か、京斗大とブルーラ社と京都市だか京都府だかでやつてゐる産学官の共同事業の母体。アルタラつていうでつかい球体の写真は見たことがある。千古先生はそこのセンター長を兼務していて、吉田や桂にほとんどいないのも、センターには住んでるからって言つてた。

そこに、堅書君の先生がいるつてことなんだろうか。

「アルタラセンターってさ、そんなに勉強しないと入れないと入れないの？ 普通の就活じゃダメなんだ？」

「研究機関だし、国際事業の一翼もあるからね。普通は学部卒では入れない。職種にもよるけど、複数の高度技術試験に合格しなければならない」

「ほえー。そんなに大変なんだ。千古研のコネがあつても無理なの？」

「千古研に在籍しているだけで入れるなら、僕だつてこんなに苦労はしていない。セン

そう言うと眼鏡君は、片手を軽く上げて階段を下りていった。

十九時四十五分か。意外と遅いんだな。一旦帰つてヤタにごはんあげて、コンビニで何か買つてくるかな。お酒は我慢。二人ともさつさと現実に戻らないとほんとヤバいからね。一時間でスパッと戻る現実逃避。システム権限で三ヶ月もほつつき歩いてるどつかの変人バッフルはマジ見習えつての。

気がつくと屋上にはあたし以外誰も残つてない。ついさきまでからりとしてた空気はいつの間にか京都特有のじつとりとした湿り気を帯びて、辺り一帯は早くもサウナみたいだ。

いつもの京都の夏が始まるとしている。祇園囃子と五山送り火に彩られる季節が今年もやつてくる。

だけどあたしにとつては違う。いつもの夏じゃない。三ヶ月限定で、真っ黒な導きの神様がついてくれてる、初めての夏だ。ここはきっと、去年までと違う新しい世界で、今度こそあたしは迷わない。そんな特別な夏が始まる予感に、浮かれすぎんなよ、あと四十時間、と自分で自分を戒めながら、あたしも研究室に向かつて階段を下り始めた。

算結果。白いフードの男性の姿やSF映画のワンシーンのような不思議な映像もあつた。微妙にマウントを取られてるような気もしたけど、見果てぬ夢を追い求めて浮世離れた生活を送つた堅書君の原風景はきっとこっちだつたんだ、と直感的に感じた。じゃあ、最初の動画は何だつたんだろう。ヤタとあたしが映つた映像は。一行さんは何が言いたいんだろう。

「行きて帰りし物語、という強力な物語類型があります。古今東西の冒險譚に共通して見られるその構造は、必ず非日常への旅立ちと現実への帰還とがセットになつていま

す」

一行さんの話は止まらない。だけど何を言つてゐるのか相変わらずわからない。

「私はようやく気づきました。ナラティブ宇宙論において、ナラティブ志向ベクトルだけを考えいてもそれは世界の正確な理解ではない、それと同じくらい、現実を志向するベクトルが重要な意味を持つ、と。現実志向という新たな次元を追加することで初めて、ナラティブ時空間における軌跡の本質は二次曲線ではなく円錐面である、という想像によく到達できたのです。これまでの私に見えていたのは、円錐のひとつ切り断面でしかなかつた」

ふと、大文字山の方角を見やる。そこにはもう、あの大輪の花の痕跡は何もない。でもさつきの、ちょっと、楽しかったな。

——この灰色の研究棟にも、もう一回くらい、非日常があつたつていい。

戻る現実があるからこそ冒険に出られるつてあの二人は言つてたけど、ちょっと違うんじやないかな。たまに冒険があるからこそ、現実を生きていける。それがあたしにとつてのリアルな気がした。

あたしは一呼吸置いて、遠ざかる背中に向かって声を張り上げた。

「おつまみとか要るー!?」

五メートル先で、眼鏡君の足が止まる。こつちを振り向く。

「その状況で飲む気かよ！……まあ、飲むなら、僕もつきあ——」

「ノンアルに決まつてんじyan！さすがに飲む勇気ないつて！」

無駄に距離があるだけに、大声でのラリーが続く。

「だよな……ヤケクソになつたんかと思った」

「……写真、どうせ撮るんでしょ。今度こそよろ！」

「や、だから當てにするなつて！……ま、そうだな、一応、超望遠持つて来るよ」

さんじょう三条の大衆居酒屋。三回生前期の演習の後半は、六人の班単位で課題をやることになつていて、今日は結成記念の飲み会だった。

厳正なる抽選の結果、うちの班は男女三人ずつっていう工学部にしては奇跡的な構成になつて、合コンかよとかイカサマじやねつて怨みのこもつた規線が、男子率100%の班からガンガン飛んできた。しかも今夜のこの飲み会は男子一人が欠席したことで、集団としてのリア度はさらにSSRまで跳ね上がつてたりする。

その欠席者が、さつきからこのテーブルでめっちゃ話題の堅書君だ。学科の中でも印象薄くて、そういうやいたつけ、つて感じのやつ。たぶんこれまであたしはしゃべつたことなかつたと思う。

班分けが終わつてTAさんが課題を説明してる間、堅書君は何か英語の本をずーっと読んでた。どう見ても演習と関係なさそうな、医学っぽい表紙の本。何やつてんだろこいつ、つて思つた。演習の後、親睦会を兼ねて飲みにでも行こうかつてみんなで盛り上がりがつて横で、堅書君だけはリュックに荷物をまとめて、そそくさと帰ろうとしてた。眼鏡君が「飲み会、行かないの？」つて声をかけたら、「いや、その、そういうのちょっと……すいません……」とかなんとかモゴモゴ言いながらスースと消えてつた。

次第に変化してゆく。薄手から厚手に、ブラウスからカーディガンに、セーターに。コンビニ袋からこつちに差し出される中身もアイスからおでんに変わる。ヤタもだんだん大人の猫のフォルムになつていく。時折知らない人や風景の映像も混じる。だけど圧倒的にヤタとあたしの姿が多かった。何気ない日々の時間が、その動画には連なつていた。決まり悪そうにしてる堅書君の横でそれを無言で眺めている一行さんには気づいて、震え上りそうになる。だけど一行さんは超然として説明を追加する。

「これらの量子記録に共通して見られるパラメータは、現実を強く志向する成分でした。ナラティブ宇宙論が主に扱う、物語を志向するベクトルとは直交するものです。というより、このような軸の存在に、これまで私は気づけていませんでした。私も堅書さんも元来、ナラティブ志向性が平均より高い人間です。ですから、どうしてもそちらの成分にのみ注目してしまい、可視化の結果にも知らず知らずのうちに偏りがありました」

別の動画が始まつた。こちらも雑多な映像の集まりみたいだ。髪の長い女性が頻繁に登場する。一行さんだ、とすぐに気づいた。高校の制服に始まり、本を読んでる横顔や勉強する姿、浴衣に水着。あたしには見せたことのない笑顔をこちらに向けている。それに次いで多いのが千古先生や大学の風景、アルタラのイメージ、講義資料や何かの計

ターにいる千古研出身者は数人だけだ。しかも千古研で博士号を取つてもエンジニア採用ではたいして重要視されない

ふう、と一度ため息を吐いてから、堅書君は熱っぽく語り続ける。

「院生として千古研に入つたところで、直接アルタラを触らせてはもらえない。所詮、学生の立場だから、アルタラのビッグデータを間接的に扱う研究がせいぜいだ。アカデミックな研究としては興味深いけど、僕が目指すのはそこじゃない。だいたい千古さん自身、全然桂にいないしね」

「じゃあ、なんで三回生から千古研に入つてたわけ？ 千古研に行つても無駄つていう話に聞こえたけど」

「正確には二回生の終わりから出入りしてた」

「はつや！」

「学部のうちに基礎知識として、千古研で博士号を取得するのと同等の知見とスキルは一応持つておきたかったんだ。桂なんかで五年間もモタモタしてられないし。それに、まあ吉田にいるよりは現場の生の情報も入りやすかつたからね」

さすがにちょっと引いた。やっぱ、頭おかしい。

そりや、心証悪くするわ。あたしだってさすがにちょっとイラッとした。  
でも、まあ、このまま悪口大会になるのもなんかイヤだった。せつかくのお酒が不味くなる。

「へえ、堅書君と実験一緒だつたんだ！……あ、レモンサワーこっちでーす！」  
やつと運ばれてきたサワーとレモン絞り器を受け取りつつ、眼鏡君の会話からバスをつないで、話を少しはポジティブな方向に持つてこうとする。ていうか、あのコミュ障野郎と知り合いなの、めっちゃ助かる。通訳代わりになつてもらおつかな。本人とはまともに話できそうにないし。

「ああ。一回生の物理学実験。ちょうどあいつと二人一組だつたから」

眼鏡君は、箸で焼鳥を串から器用に外しながら答えた。

「物理学実験ってあの、めっちゃキツいってやつ？」

「うん、それ。レポートがすっげえ地獄でさ。で、堅書君に毎回見せてもらつて」

「え、マジで!?」

「実は重宝する系？」

「ええー……。普通に学部の勉強やりながら、そんなことしてたの!?」

「まあ、ほら、うちの大学、単位が空から降つてくるつて言うし。それと般教の自然群あたりは高一の頃にひととおり即席で詰め込んでたから」

「高一で!? なんで!?」

「ええと、なんていうか……ちょっと特訓的なことをやつてて、先生と」

「先生と、特訓……!?」

「主に物理や化学と、そのための数学くらいだけど」

「ヤツバ……！」

高一で大学レベルの特訓つて何。堅書君の先生とやらも、相当危ない人っぽい気がする。

それにしても、堅書君が早い段階から桂キャンパスに通つてたのは桂に身を捧げるためなのかと思ってたけど、むしろ逆だつた。桂での院生生活五年間を早回しすることで、桂から早く去るためだつたんだ。あれほどストイックな堅書君でさえ桂キャンパスを出たがつてたなんて、何か笑っちゃつた。

「だから堅書君、院試受けないのかー。アルタラセンター一本勝負なんだ」

屋上に集まつてた人達もばらばらと散り始めている。いつもの土曜日の研究棟の風景が戻つてきつた。ああ、そうだ。月曜の午前三時までに国際会議用の予稿を投稿しなきゃいけないんだつた。ずーんと心が重くなる。非日常は一瞬で終わつた。厳しい現実つてやつに戻るしかない。

「じゃ、僕、先戻るから」

「あー、うん。おつ」

階段のほうに向かつた眼鏡君は、急に止まつてこちらを振り向くと、

「あ、花火。一応、今日の十九時四十五分」

とだけほそつと言つて、また歩き出した。背中越しに声をかける。

「ふーん。今日も研究室泊まんの？」

眼鏡君は歩きながら、こちらを振り返らずに答える。

「悪かったな。どうせ泊まりだよ。デバッグ終わりそうにないし」

「あっそ、あたしも予稿の締切まであと四十時間」

「……死ぬなよ」

「ええー……。普通に学部の勉強やりながら、そんなことしてたの!?」  
「まあ、ほら、うちの大学、単位が空から降つてくるつて言うし。それと般教の自然群あたりは高一の頃にひととおり即席で詰め込んでたから」

「高一で!? なんで!?」

「ええと、なんていうか……ちょっと特訓的なことをやつてて、先生と」

「先生と、特訓……!?」

「主に物理や化学と、そのための数学くらいだけど」

「ヤツバ……！」

高一で大学レベルの特訓つて何。堅書君の先生とやらも、相当危ない人っぽい気がする。

それにしても、堅書君が早い段階から桂キャンパスに通つてたのは桂に身を捧げるためなのかと思ってたけど、むしろ逆だつた。桂での院生生活五年間を早回しすることで、桂から早く去るためだつたんだ。あれほどストイックな堅書君でさえ桂キャンパスを出たがつてたなんて、何か笑っちゃつた。

「だから堅書君、院試受けないのかー。アルタラセンター一本勝負なんだ」

変わることなく、何かをフライパンからお皿に盛りつけている。パスタだ。二皿のうちのひとつをこちらに差し出してくる。何かに腰掛け食べ始める。ミュート再生だから音声は聞こえないけど、食べながらもこつちに何か話しかけてたり、大爆笑したり、小突いてきたり、睨み付けたり。くるくると表情を変えながらも、カメラに向かつて笑いかけてくる。

「え。待つて。何これ。今、あたし、何を見せられてるんだろ。  
そこに映つているのは。

「毎朝の洗面台の鏡の向こうに、散々見飽きた顔だつた。  
「なに、これ……。あたし……？ あたしが……映つてんの？」

堅書君が無言で頷いた。

「え？ な、なんで!? いつの間に撮つてたのこれ！」

「撮つてたわけじゃない。僕の量子精神データを元に生成した動画だ。僕の視点になつてるのはそのためだ。その……なんか、ごめん」

「なつ……」

顔が一気に熱くなる。短いカットが次々に映し出される。画面の中のあたしの服装は

数分後にはただ夏の空だけがそこに広がっていて、さつきまで六つの輪つかが浮かんでいたなんて、まるで信じられなかつた。夢だつたような気すらしてしまつ。

「やべ、写真撮るの忘れた」

「あ、あたしもじやん！ ちょっと、なんで撮つてないの！ 当てにしてたのに！」

「人を当てにすんなよ！」

堅書君はもう先生に会えたかな。全然違う時間軸だから「もう」ってのも変なんだけど、きっと会えただろうなつて思つた。彼らの軌跡は橈円を描いて、千古先生でさえ到達しえなかつた地平に到達する。そして絶対、ここに戻つてくる。ヤタとあたしが待つてゐるこの世界に。あの航跡を見た瞬間、もう大丈夫だつて思えた。

もう大丈夫だ。あたしも。きっと。

信じられないからこそ、もう一度見たいと思える。会いたいと思える。

堅書君はもう先生に会えたかな。全然違う時間軸だから「もう」ってのも変なんだけど、きっと会えただろうなつて思つた。彼らの軌跡は橈円を描いて、千古先生でさえ到達しえなかつた地平に到達する。そして絶対、ここに戻つてくる。ヤタとあたしが待つてゐるこの世界に。あの航跡を見た瞬間、もう大丈夫だつて思えた。

もう大丈夫だ。あたしも。きっと。

「その差分と強い相関を示す周辺の量子記録を抽出して可視化を試みたのが、こちらです。もちろん量子記録データの内部表現をアルタラから直接取り出すことは原理上不可能ですから、あくまで拡散モデルによる推定です。画像生成AIと原理的には同じと思つて良いかと」

解像度の低い動画クリップの再生が始まつた。全体的にぼやけていて、細部はよくわからぬ。だけど、動画の中でうごめいてる黒っぽい何かの特徴的な動きに、あたしは見覚えがあつた。

「…………え、これつて。……ヤタ!?」

それは確かに、ヤタの動きだつた。しつぽをぴんと立ててすりすりしてくる姿、大きく伸びをしてごろんとお腹をみせる姿、一心不乱に猫ミルクを舐める姿、ストーブの前に陣取つて丸くなつてゐる姿。次々とカットインする粗いピクセルの中にいるのはどう見てもヤタだ。子猫の時からずつと見てきたから、はつきりとわかる。

画面がズームアウトして、ヤタの隣に何か別の物体がフレームインしてくる。猫よりもっと大きな何か。手ブレとともにアンダルが変わつて、動いているそれが人だと気づく。明るめの髪に白っぽい服。ヤタをなで回したり、タオルでくるんだり。また場面が

「それめっちゃ助かるわー」

「見せてもらひすぎっしょ」

予想外の耳寄り情報に、みんなが一気に食いつく。少なくとも戦力としてはカウンントできそうで、少しほつとした。

「マジ。あいつ人見知りなだけで、話すとまあ、普通にいいやつだし、課題とかもちゃんとやるタイプ」

「なんだ、サボる気満々なんかなつて思つてたわ」

「だよね。人の話、ぜんつぜん聞いてなさげだつたし」

「そこは大丈夫だと思うよ。基本、眞面目だし、頭もいいしね。……あ、でも」

眼鏡君はちよつと言ひよどんで、ジョッキに残つたビールを一息にあおつた。

「——昔はもう少し人付き合い良かつたかも。飲み会とかも一応出てたし、あんな勉強一筋つて感じじやなかつた。なんだろうな、もうちよい人生楽しそうだつたつていうか」

何やら不穏な流れに、全力でレモンを搾つてたあたしの手が思わず止まる。

「え、なにそれどゆこと？」

「ああ。これに賭けてる」

大博打だなあという氣もするけど、やりたいことを追いかけの姿はちよつとうらやましいなつて思つた。あたしは、なんとなくまだ就職したくなくて大学院を考えるだけだし、修士課程を出た先で自分が何をやりたいのかも見えてない。

「てことは、アルタラセンターにその先生がいて、一緒に働きたいつてこと？ でもさ、お礼を言うだけなら、普通に千古先生にでも頼んでみたら会わせてくれたりしないんかな」

「うーん……。今のセンターにはいない、といふべきかな。まあ、アルタラセンター自体は足がかりにすぎない」

あれ、先生つて、センターの人じやないんだ。海外のこの分野の権威とかなのかな。

センターの人脈を伝手に、何とか接点を作ろうとしてるとか？

「それと、千古さんに頼んでも会えるわけでもない。というより千古さんには先生の話は一切していない」

「え、なんで！？ 千古研の先輩とか、センターの人にも？ ええと、あと何でつたつけ、助教の女人の人」

「んー、なんかあいつ、最近ちょっと変わったんだよね。前はもっと普通だった」  
さつきまでボロクソ言つてた女子組もヤバつて顔をしてる。

「は？ やっぱ今は普通じゃないってこと？」  
てか、昔は飲み会出てたんだ？ それってなんか余計ムカつかない？」

ああもう、またそっち方向に話戻さないでよ、とハデ子に内心うんざりしてると、「俺の見立てによるとだな。……それはばり、彼女に振られたんだな！」

と斜め横から断言調で迷推理が飛んできた。変T。なんでうれしそうなこいつ。

「えー、『彼女』未満の段階なんぢやない？」 片想いの相手に告つて玉砕した的な？」

「絶対それ！ どう見ても、彼女いない歴イコール年齢つてやつ！」とケラケラ笑う女子たち。なぜか言葉に詰まる変T。

だけど、それを眼鏡君は即座に否定した。

「や、堅書君は彼女いたよ」

瞬間、みんなの笑い声が止まつた。眼鏡君は淡々と真顔で、でも自信ありげに続けた。

「ていうか、いる。たぶん今でも普通につきあつてると思つ」

「徐さんかな。話してない。千古研やセンターの人達も知らないと思う」  
意味がわからなかつた。こういう時つて、普通は同じ分野の人に相談してみるもんだよね。なのに、なぜか堅書君は一人で全部やろうとしてる。

一瞬、ぞくりとした。

この人は、堅書君は、あの千古先生の研究のさらに先に行こうとしてるのかもしれない。何か、とんでもないことをやつてやろうとしてるのかもしれない。

なんていうか、もうそれは、あたしなんかが聞いたときつと理解できるわけないんだろうな、って気がした。

堅書君はアルタラセンターに入つて、そんでなんか頑張つて、先生に会う。あたしがわかつたのはそれだけだ。まあ、危ない話とかじやなくて少しほつとしたけど。

あ、でも。

この話を知る権利がある人が、まだもう一人いる。堅書君の密かな野望のせいであつちや苦労させられてるらしい人が。

「じゃあさ、彼女さんは……？」

背中を汗がつたうのを感じた。

「ああ……」

「あたしたちはバカみたいに口をぽかんと開けて、天空に正確に作図された円の重なり輪の周りに五つの輪が重なつて、まるで五弁の花びらみたいだ。」

「エグいねー……」

「ああ……」

「あたしたちはバカみたいに口をぽかんと開けて、天空に正確に作図された円の重なりをただ見つめることしかできない。その光景はきっと、この千年の古都でさえ初めて仰ぎ見る非日常なんだろうと思う。千年前の人が見たら何て言うかな。何も言葉が出てこないあたしよりはマシな形容するだろうな。」

「サクラと……レインフォール？ や、サンライズかな」

眼鏡君でさえ、どこか声が上ずつて、少しかすれてる。

気がつくと機体は再び一箇所に集まり、北の空に向かつて小さくなつてゆく。

「あ、もう行っちゃう」

今頃になつてコオオオというかすかな音が上空から耳に届き始める。次第にスモークの白い航跡が薄くなり、ゆっくりと青空に溶け出していく。

「……消えちゃつた」

くそ、山に隠れた」  
予想以上にしょぼい飛行にがっかりして研究室に戻ろうとする、さつきより大きな歓声が背後から聞こえた。

「え？……あ！」

一旦は比叡山に隠された機体たちが、右側から再び現れた。だいぶ近い気がする。尾を曳くスマートがゆるやかな弧を描き始めた。

「やつた！こっち来た！」

「仰角高いな！もしかして山科あたりまで來てるか？！」

突然、六機の姿勢がいつせいに傾き、花が咲くように四方に散開した。

「うわっ……！」

「え？」

それぞれの機体は大きく旋回態勢に入る。時間差でキラリと光りながら、ダイナミックな機動で空の高みを駆けてゆく。抜けるような濃い青空に純白のスマートがぐんぐん伸びて、くつきりと鮮やかな六条の円弧が同時並行で描かれていく。

やがて各機体が旋回を終え、各々の真っ白な航跡は閉じた円を形づくる。ちょうど大

ああもう。まつたく、この二人は。いつだつてそれだよね。いつもそうやって、自分たちだけ納得して、論理を全部すつ飛ばしてさ。

「……話飛びすぎなんだつてば！」

彼らの論理の飛躍には慣れたつもりでいたけど、今日のそれは特大の場外ホームラン級で、史上最高に話が見えなくなつていて。さつきまで心を満たしてた虚無すら、どつかに吹き飛んでしまつた気がする。あの胸糞悪い心中話がほんとにあたしの誤解だつたつていうなら、真相で早く上書きてしまいたい。もうホラ話でも何でもいい。後味の悪い誤解に、これ以上苛まれたくない。

「何だか知らないけど、あたしが勘違ひしてたつて言うならさ」

運ばれてきたコーヒーカップを一口啜つてから、

「——ちゃんとわかるように説明してもらおうじゃないの」

拳でテーブルをどんと叩いて、二人を睨み付けた。

(二)

「——ちゃんとわかるように説明してもらおうじゃないの」

拳でテーブルをどんと叩いて、二人を睨み付けた。

(一)

「え？ 堅書君で彼女いるんだ！ あはは、まさかの展開！ 面白すぎ！」

「なんだと……。堅書でさえ彼女がいるのに、俺は、俺は……」

再び大爆笑する女子二人とうなだれる男子一人を無視して、

「えマジで？ それってどんな人？」

とあたしはやや食い気味に尋ねる。あんな協調性ゼロ、コミュニケーションの塊みたいな人間に彼女さんがいるなんてびっくりで、単純に好奇心がうずいた。

「僕も会つたことはないけど……。だいぶ前だけ写真見せてもらつたら普通に美人だつた。なんかハーフツインテール？ ていうのかな？ 髪が」

眼鏡君はジョッキを置いて、両耳の上あたりで髪を軽く束ねるような仕草をしてみせる。

「え、ヤツバ！ 何それ二次元？ あ、Vカノ？」

「や、普通にリアル。京斗大生つて言つてた。学部は違うっぽいけど、同じ二回生らしいよ」

「彼さんは知つてるの？ 堅書君が何のためにこんなに苦労してるのか」

「ええと……。アルタラセンターに入りたつていうこと、それまでの数年間、勉強に専念させてほしいということは伝えてる。彼女もそれを認めてくれて、僕の好きなようにながらせてもらっている。だけど、その目的が先生との再会だということは、たぶん知らないと思う」

「そうなんだ……」

さすがに、何も知られずに放置つてわけじゃなかつた。納得もしてくるなんなら、うん、まあ……良かつた、んだろうな。

でも、先生のこと、恋人にも話してないんだね。ひよつとして、ひよつとするとこれ、堅書君の他は、あたししか知らないつてことなんだろうか。

「先生の話、あたし聞いた良かつたんかな」

「ヤタのこととこれだけ世話をなつてるし、専門的な話も通じるから、まあ訊かれたら話してもいいかなと思つて。僕自身の問題だから、基本的には他言しないつもりだけ

「マジかー！ てか、うちの大学でハーフツインて何者!?」

「あ、あと高一からずっとつきてるって言つててびびった」

「高一！ 足かけ六年じやん！ どんだけ！ すご！ すごすぎなんだけ！」

「昼に会つた堅書君とギャップがありすぎて、イメージが音を立てて崩れていく。」

「テンションたつか」

「ハーフツインのリアル彼女だとお……。くそつ、あいつ、前世でどんな善行を積んだってんだよ……！」

「あんたVカノと添い遂げるんじゃなかつたつけ」

あの堅書君も、普通に恋バナなんてするんだ。なんか意外。ていうか、昔は別に、普通の人、だつたつて話だつたつけ。だとしたら、何かあつたんかな。普通の人が豹変しちやうような出来事が。それこそ、その彼女さんに振られちゃつたとか。

「ていうかさ、ほんとに今でもつきあつてるんかな？」

急に振られて、落ち込みまくつ

てんのかもよ？」と直球で尋ねてみる。

「少なくとも、先月の時点では、週一で会つてるとは言つてた」

「そっかー」

千古先生も恋人も知らない、ささやかな秘密だ。

「ふふ、じゃ、あたしもみんなには黙つてるね」

その時、ヤタが小さく鳴いた。

「そっか、ヤタもだね。この話は、堅書君とあたしとヤタだけの秘密。ヤタ、人に言つちやダメだかんね！」

ヤタはすりすりとあたしのサンダルの先に甘えてくる。甘えるのは子猫の特権だ。

片手でヤタをあやしながらあたしは、このまま堅書君が恋人を放置して勉強を続けて

くれても別にいいんだよつて思つちやつてるのに気づく。こんな風に、時々ヤタのお世話をしながら、ただ堅書君と他愛のない話をする。そんな日常がずっと続いてくれればいいなつて。

だけどそれつて、堅書君の人生にとつて、いいことなんだろうか、とも思う。

やりたいことがあるのはわかつた。幸せになつていいんだと堅書君が心の底から思え

るためなら、その夢は絶対に叶えるべきだと思つた。だけど、そのため恋人と会つのも我慢して、毎日不健康な食生活して、一分一秒も惜しんで貴重な大学生活を勉強に捧

急に、屋上の手すりの前に陣取つてた人達がざわめき出した。北東の空を指差しながら声を上げてる。

「え、来た？ 来たの！？ どこどこ？」

「どこだろ、見えないな」

みんなが見てる方向に目を向けてみたけど、それらしいものは何も見えない。

「あ。……あれか。もしかして」

「え！ どれ！ わかんないんだけど！」

「ほら、鉄塔の左から三番目……あ、四番目。結構速い」

よくよく目をこらすと、ゴマ粒みたいな点の集合体が山の端ギリギリのところを北から南に向けて少しずつ移動している。

「ちっさ!! めっちゃちっさ！ 点じやん、点！」

「あー、さすがに遠かったかあ」

「もっとゴオオオつてやつ想像してたのにー！ パイロットの顔が見えるくらいの。詐欺じやん！」

うな感触があつた。

「しかしその後、堅書さんと検討を重ねた結果、離心率eを1未満に抑えられる可能性が出てきたのです」

何それ。

そんな後付け説明みたいなこと今さら言われても。もし本当ならそれは普通に朗報で、あたしは無駄に心配してたことになる。だけど、信用していいものなんだろか。そんな展開、あまりにご都合主義過ぎる。

「そのきっかけとなつたのが……貴方です。貴方は、私達を救つてくれました」

「へ…………？？？」

行先がまるで見えなかつた話の矛先が急角度でこつちに突つ込んできて、気づいた瞬間には吹つ飛ばされていた。

「ああ、一行さんの言うとおりなんだ。助けてくれて、本当に感謝している。おかげで、

僕達の軌跡は橢円を描けるようになる。またここに戻つて来れる」

あたしは完全にあきれ返りながら、目の前のバカップルを見る。

「あ、さあ……」

エキセントリシティ

出入りして、学部卒でサクッとアルタラセンターに入っちゃって、彼女さんを連れて先生に会いに、今にも物語の大平原を渡ろうとしている堅書君は、とんでもなく頭おかしい。その計画の一部に加担した立場としても、その思いはぬぐえなかつた。

「そろそろじゃないかな。僕の時計で一分切つた」

「どの辺かな」

「滋賀だから……比叡山のほう?」

眼鏡君はしきりにスマホのコンパスと山並みを見比べている。

「アバウトすぎ! 琵琶湖とか見えないかなあ」

「さすがに湖面は無理だろ。でも琵琶湖の花火はギリ見えたらしい」

「え、こつから花火見えんの! めっちゃ見てみたいんだけど!」

「がつてきなよ」

「今夜!? マジで? エ、ヤバ、なんでそんなの把握してんの!」

「……するだろ、普通。……こういう時用に」

「は? なんで?! しないって!」

「そのことで、ひとつ謝りたいことがある  
二人で無謀な実験して死ぬって話? その話はいいよ、もう。勝手にしなよって言つたんだから。

心をさらに硬くする。強くバリアを張る。

だけど。

続く堅書君の言葉に、あたしは完全に混乱した。

「もしかしたらあらぬ誤解を与えてしまったんじゃないかなつて。心配をかけて本当に申し訳ない。だけど、訂正させてほしい。——僕達は片道切符の旅に出かけるつもりはない。もし行けるとしても、必ず戻つてくるつもりだ」

「え……? 聞いてた話と違うんだけど。」

「は? 戻つて来れないって言つたじやん。じゃあ、あの話は何だつたわけ」

「私からもお詫びを。本当に申し訳なかつたと思つています。ただ、言い訳がましいのは承知ですが、騙す意図は全くなかつたのです。貴方にお話しされたあの時点では、私達も確かにそう思つていました。帰還は不可能であると」

一行さんが弁明する。相変わらず無愛想なその口調には確かにどこか、申し訳なさそげるのつて、どうなんだろうか。

「彼女、本屋でバイトしてるらしくてさ、あいつ、サイン本取り置きしてもらつたとかなんとか」

「ウケる。なにげにちやつかりしてんなー。てか結構堅書君としゃべつてんだね」

「うん。あいつ話振ると結構しゃべるよ。……それに、堅書君が何かおかしくなつたのつて、二回生の後期くらいからなんだよね。でも彼女とは今でも普通に続いてるっぽい。だから、なんとなくだけど、彼女は関係ないんだと思う」

会話をどうつなげたらいいかわからず、五人とも黙つてしまつた。

「まあ、倦怠期とかかもしれないよね。そんだけ長くつきあつてるとさ——」

絞りきつたレモン汁をサワーのグラスに注いで、あたしはわかつたような口をきく。ほんとは何もわかつてないし、言つてから自分でも意味不明な返しだなつて思う。それでも、二回生の後期つて何かあつたつけ、つて考えてみたけど、心当たりは全然ない。

小動物ちゃんがカルーアミルクをマドラーでくるくるかき混ぜながら、

「おかしくなつた、つて、メンタルとかかな……」と深刻そうな声で言う。さつきまで本人が聞いたらメンタルやられそうな誹謗中傷連発してたのあんたでしょ、と心の中でそつと突つ込みを入れる。

将来の大きな夢と、日常の小さな幸せ。

あたしの中で、二つの矛盾した感情がぐるぐるせめぎあつてゐる。

「でもさ」

少し考えて、やつと口にした。

「先生に会いたいのはわかつたけどさ、堅書君は無理しすぎなんだよ」

本と机とPCしかない部屋を見回しながら続ける。

「こんな生活してたらマジ死んじやうつて。勉強しながらでも、もうちょっとこう、大

学生らしい楽しみとか、生活の彩りとかさ。就職しちゃうならおさらだよ」

「そんな器用なことはできないよ。僕は要領が良くないから、一分一秒でも愚直に頑張るしかないんだ」

「堅書君てさ。……わりとDMだよね」

堅書君は少し考え込んだ後、急に何かに気づいたみたいな顔をして、こんなことを思つた。

「あ、いや、あいつ、別にメンタルとかはないと思うよ。ちょっとと言い過ぎだったかも。  
悪かった」

眼鏡君があわてて言い直す。

「そうだな、ええと、おかしくなつたつていうより……うーん、なんだろうな、余裕が  
なくなつたつていうのかな。必死感でいうか。受験生の十二月みたいな感じ？」

「ああー……」

大学受験は一応あしたちの共通体験だつたから、眼鏡君のその一言でみんな妙に納  
得した。そつか、ああいう感じか。でも、何なんだろうな？　まさかここまで来て仮面  
浪人なわけないし。

「なんだろ、就活？」

「えー、そもそも就活ならまずコミュ力上げろよって思わん？」

「だよねー。私達だつてさ、バイトとかインターンとか死ぬほど入つてるけど、演習も  
ちゃんとやつてきたいからこういう会を設けてんのにさ」

「院試だつて、まだ一年以上あるしな。いや、むしろ今年が遊ぶ最後のチャンスなんだ  
よな……。人生最後の夏休み、か……。くつ……」

んだ。時間も健康も人間関係も全部切り捨てて、十年もの歳月をただひたすら目標遂行  
だけに捧げてきた。……もしかすると、先生を追いかけるあまり、知らないうちに僕の  
生き方もそれに縛られてしまつてのかなって

それを聞いてさすがに、バカかなつて思った。ベンキヨしすぎて、バカになつちやつ  
たのかなつて。だから思わず言つちゃつた。

「は？　バカじゃないの！？　いくら恩師だつて、所詮、他人じやん」

露骨にムツとする堅書君。他人じやないんだよつて顔をしてる。結構、考へてること  
がそのまま顔に出るんだよね。うん、まあ、ちょっとと言ひ過ぎたかな。ごめん。  
もしかしたらそれは、堅書君なりの、サバイバーズ・ギルトに対する不器用な償いな  
のかもしぬなかつた。あえて先生と同じ苦労を背負い込むことで、少しでも不公平さを  
埋めようとする、無意識の行動なのかもしれない。

だけど、やっぱりそれは間違つてる、つて思つた。堅書君がそこに負い目を感じる必  
要なんて、全然ない。

「いや、まあ、なんつーかさ、先生は先生の人生、堅書君は堅書君の人生があつてさ、  
それつてまるつきり別物なわけじゃん」

以内には、別の宇宙に向けてナラティブ時空間での遷移を始める。今日の二人は文字通り、物語の主人公だ。ん、違うか。最初からずつと主人公だつたのかもしれないって  
思つた。きっとこの宇宙が生まれる前から。あのバカッフルめ。

あたしがやれることは全部やつた。だから今は無事を祈るだけだ。

ふと周囲を見回すと、隣の研究室の眼鏡君も上がってききて、右腕を前に伸ばして握  
りこぶしで仰角を測つたりしてゐる。

「やつほ。土曜なのに物好きだねー」

「お互いな。ていうか、土日いつもいるよね」

「そっちこそ！」

百人近くいた学科の同級生のうち、未だに大学に残つてゐるのは数えるほどで、彼はそ  
んな数少ない腐れ縁の人だつた。コンサルや金融、IT企業や大手電機メーカーに就職  
し、王道な人生に向けて着実に歩みを進める仲間たちを尻目に、博士後期課程という醉  
狂な道を選んだあしたちは変人の仲間入りをしたのかもしれない。

だけどやつぱり、堅書君に比べたら普通すぎる人生だと思つた。二回生から千古研に

しろタメ口のあたしのほうが、アウエイ感を持つてしまう。たつた一メートル先に並んで  
いる二人が、とてつもなく遠く感じた。

「カフェ三つお願いします、学割で」

学生証を掲げたのはあたしと一行さんだけだつたけど、店員さんは三人とも学割扱い  
にしてくれた。まあ、今日こんな恰好をしてる時点で、どう見ても学生だし。

「えつと……ありがとう。僕の学生証、さつき教務に返却してしまつたから  
あ、てことは」

「ああ、おかげさまでアルタラセンターへの入所が決まつた。まずはお礼を言いたい。  
本当にありがとう、感謝して」

「そつか、おめでとう」

「うつ、と内心いながら事務的に返す。

入店したときから、あたしの心は風いでいた。何も考えないようにしてた。なのにこ  
んな話されると、思い出しちゃうじゃん。しかも、うつかりこの話を引き出してしまつ  
たのは自分だ。濁のように心の奥底に溜まつてた不機嫌が浮き上がりかける。

ないほどにからつとしていた。京都タワー や 清水寺 はもちろん、比叡山 や 音羽山 までがくつきりと見える。

土曜日だつていうのに、屋上にはすでに十数人の学生や教職員が陣取つて、三脚にスマホをセットしたり、SNSで最新情報を漁つたりしている。何かのイベントで十数年ぶりに自衛隊の飛行機が滋賀県上空を展示飛行するんだそうで、物好きな人達が桂キャンパス近辺で一番高いこの建物に集まつてきてるのだった。と言つてもここから滋賀までは距離があるし、ほんとに見えるかどうかはかなり怪しい。計算上は見えるんだとか、近くの山からおお津プリンスホテルの先端が見えたとか主張してるやつらもいて、あーはいはいとか思いながらも、結構あたしは楽しんでたりする。

二〇三七年七月四日、午前十時過ぎ。計画通りなら今頃、アルタラセンター管轄下のクラス3区域内で最終シーケンスが走り始めてるはずだ。センター長の千古先生によつて巧妙に人払いされて、あたしも現場に近づくことはできない。そもそも堅書君と一緒にさんがいるのはアルタラセンター内なのか、というより京都市内なのかすらわからない。まあ、物理的な場所なんてどうだつていい。彼らの量子精神データはもうあと数分

前に昔からある有名な喫茶店まで来てしまつた。ここに歩いてくるまでにすでに十五分くらい経過していて、残り十五分で解放してもらえるとはとても思えない。あたしは半

分諦めの境地でここに座つて。散々な卒業式だ。

意外にも、店内の混雑度は普段と変わらない。袴姿は目立つかなと思つたけど、周囲の誰もまるで気にしてないみたいだ。年齢不詳の男性が分厚い英語の本を読んでたり、留学生たちがタブレットを片手に静かに議論してたりして、いつもと同じ時間が流れている。今日が卒業式だなんてことを忘れちやいそうになる。

向かいに並んで座つての堅書君と一行さんは、互いに敬語でひそひそとメニューを相談し合つてゐる。

「あ、一行さん、ほら、学割メニューがあるみたいですよ」  
「ありがとうございます。……では、私はこれを」

「僕も、カフェにしますね」

ですます禁止令の効力範囲がうちの班だけつてことは前々からわかつてたけど、一行さんともですます調で話してゐるなんて、想像すらしてなかつた。その光景はあたしに予想外のダメージを与えた。誰にも邪魔できない完成された空間が二人を包んでゐる。む

またもや謎にくづおれでいる変Tの横でぼそと眼鏡君が放つた一言が、今日の飲み会で一番のハイライトだつたかもしれない。

「なんかあいつさ、もう研究室に入つてんだよね」

「ええー!?!」

「マジ?」

「はあ? なんで?!?」

「ちょ、研究室配属つて四回生からじやないの?」

うちの学部は四回生になると研究室に配属されて、一年かけて卒業論文を書くことになつてゐる。だいたいの研究室は今あしたちがいる吉田 キヤンバスから遠く離れた桂キャンパスにあつて、四回生と院生、教職員しかいない灰色の陸の孤島は、毎日がお祭りみたいな吉田とはあまりに別世界つていう印象があつた。

「じゃあ堅書君つて、桂に通つてること?」

「そうらしい。あいつ講義終わるといつも桂バスで速攻あつちに帰るんだよ」  
だから、演習のあとすぐに消えてたのか。

前に昔からある有名な喫茶店まで来てしまつた。ここに歩いてくるまでにすでに十五分くらい経過していて、残り十五分で解放してもらえるとはとても思えない。あたしは半

分諦めの境地でここに座つて。散々な卒業式だ。

意外にも、店内の混雑度は普段と変わらない。袴姿は目立つかなと思つたけど、周囲の誰もまるで気にしてないみたいだ。年齢不詳の男性が分厚い英語の本を読んでたり、留学生たちがタブレットを片手に静かに議論してたりして、いつもと同じ時間が流れている。今日が卒業式だなんてことを忘れちやいそうになる。

向かいに並んで座つての堅書君と一行さんは、互いに敬語でひそひそとメニューを相談し合つてゐる。

「あ、一行さん、ほら、学割メニューがあるみたいですよ」  
「ありがとうございます。……では、私はこれを」

「僕も、カフェにしますね」

ですます禁止令の効力範囲がうちの班だけつてことは前々からわかつてたけど、一行さんともですます調で話してゐるなんて、想像すらしてなかつた。その光景はあたしに予想外のダメージを与えた。誰にも邪魔できない完成された空間が二人を包んでゐる。む

他人の人生をなぞつたつてしまふがない。堅書君は自分の人生をちゃんと生きて、それで堂々と先生に会いに行けばいい。

堅書君は何か反論したそうにも見えただけど、黙りこくつて何やら考えている。

「それに先生だつてそんなこと堅書君に望んでないと思うよ。先生がどんだけ苦労したかしんないけどさ、教え子にもそれを体験させようなんて、負の連鎖だよ」

「…………」

「だから、堅書君が先生に憧れる気持ちはわかるけどさ、それに人生を束縛されちゃダメだよ。そこまで生き急がなくたつて、先生だつてきっと待つててくれるよ」

「……そうか」

「もつとさ、大学生らしいこともやりなよ。今日みたくダラダラおしゃべりする日があつたつていいじゃん。ヤタのことも堅書君のこと、いつでも力になるからさ」

「そうだな。ありがとう」

「彼女さんともたまには遊びに行つたりしてあげなよ」

調子に乗つて、さつきまでは思つてもみなかつたことを言つてみたりする。でも今はなんだか素直にそう思えた。堅書君には、普通の大学生の楽しみをちゃんと知つておい

前に昔からある有名な喫茶店まで来てしまつた。ここに歩いてくるまでにすでに十五分くらい経過していて、残り十五分で解放してもらえるとはとても思えない。あたしは半

分諦めの境地でここに座つて。散々な卒業式だ。

意外にも、店内の混雑度は普段と変わらない。袴姿は目立つかなと思つたけど、周囲の誰もまるで気にしてないみたいだ。年齢不詳の男性が分厚い英語の本を読んでたり、留学生たちがタブレットを片手に静かに議論してたりして、いつもと同じ時間が流れている。今日が卒業式だなんてことを忘れちやいそうになる。

向かいに並んで座つての堅書君と一行さんは、互いに敬語でひそひそとメニューを相談し合つてゐる。

「あ、一行さん、ほら、学割メニューがあるみたいですよ」  
「ありがとうございます。……では、私はこれを」

「僕も、カフェにしますね」

ですます禁止令の効力範囲がうちの班だけつてことは前々からわかつてたけど、一行さんともですます調で話してゐるなんて、想像すらしてなかつた。その光景はあたしに予想外のダメージを与えた。誰にも邪魔できない完成された空間が二人を包んでゐる。む

他人の人生をなぞつたつてしまふがない。堅書君は自分の人生をちゃんと生きて、それで堂々と先生に会いに行けばいい。

堅書君は何か反論したそうにも見えただけど、黙りこくつて何やら考えている。

「それに先生だつてそんなこと堅書君に望んでないと思うよ。先生がどんだけ苦労したかしんないけどさ、教え子にもそれを体験させようなんて、負の連鎖だよ」

「…………」

「だから、堅書君が先生に憧れる気持ちはわかるけどさ、それに人生を束縛されちゃダメだよ。そこまで生き急がなくたつて、先生だつてきっと待つててくれるよ」

「……そうか」

「もつとさ、大学生らしいこともやりなよ。今日みたくダラダラおしゃべりする日があつたつていいじゃん。ヤタのことも堅書君のこと、いつでも力になるからさ」

「そうだな。ありがとう」

「彼女さんともたまには遊びに行つたりしてあげなよ」

調子に乗つて、さつきまでは思つてもみなかつたことを言つてみたりする。でも今はなんだか素直にそう思えた。堅書君には、普通の大学生の楽しみをちゃんと知つておい

「うん、元々実家住みだつたらしいんだけど、なんか最近、桂で一人暮らし始めたつて」

「気イ早すぎ！ 私なんかむしろ一秒でも長く吉田にとどまりたいんだけど」

「それはあたしも同感で、来年四月から『島流し』にあうことを考えると、正直ちよつと憂鬱だつた。」

「どうなんだろ。正式な配属じやなくて、ただ出入りさせてもらつてるつてだけなん

じゃね？」

「かもしだれないな。千古研らしいんだけど、あの先生よく『気軽に遊びにおいで』つて言つてるし」

「あー、それ、めっちゃ言つてそう」

千古先生は、奇人変人が多いうちの学科の教授陣の中でもとびきり変わつてて、講義もカオスすぎて何言つてるのかわからなかつたけど、とにかく楽しそうにやりたい放題やつてる先生だつた。もつとも、本人は普段はあまり桂にも吉田にもいないらしくて、御所の近くにメインオフィスがあるんだつて言つてた気がする。

てほしいつて思つた。  
だつてさ、あたしたち。

もう、四回生なんだよ。

「そんじや、ヤタ、そろそろ獣医さんのところに行こつか。あんまり遅くならないほう

がいいし、お前のご主人様は今日も留守番して猛勉強だからね！」

立ち上がりつて、猫用キヤリーを組み立てる。

「ほら、ヤタ、入んなー」

ヤタはどうしてもキヤリーに入つてくれない。お気に入りのタオルを中に敷いてもダメ。抱えて入れようとしても、キヤリーの入り口に足をかけて踏ん張つて、手の間からするりと逃げちやう。せつかくわざわざ実家から持つてきてよく洗つたのに。うちのフクちゃんの匂いがついちゃつてるか。んー、しようがないなあ。抱え上げて、いつもの段ボール箱にひょいと入れると、大人しく丸くなつた。

すっかりカピカピになつたお皿を重ねながら、堅書君が「今日はありがとう。助かつた」なんて殊勝なことを言つた。

り強くなつていた。「じゃ、また」吹き込む雨粒をよけつつ、堅書君はマンションの廊下の奥に消えていく。

ゆつくりと音を立ててドアが閉まつた。玄関にはあたしとヤタと段ボール箱だけが残された。

ヤタの温もりを腕の中に抱きかかえたまま、あたしはのろのろと、閉ざされた緩衝地帯にしゃがみこんだ。最後まで言えなかつた言葉をぐつと呑み込む。鼻の奥がつんと痛んだ。

「バーカ……」

首を伸ばしたヤタが、あたしのほつぺたをペロペロと舐めた。ヤタの小さな舌はざらざらしてて、ちょっとだけ痛かつた。

(二)

うしても説明しておきたいことがあるんだ。三〇分だけ、時間をもらえないかな。……  
ヤタのためにも

堅書君は卑怯だ。ヤタの名前を出せば、あたしが断れないつて知つて言つてる。  
一行さんも何やら真剣な面持ちで頭を下げた。

「私からもきちんとお詫びを。それと、お見せしたいものも。お時間、預けませんか」  
二人を冷たくあしらい、無下に断るための気力すら、もはや湧いてこなかつた。もういっそ、好きにすればいい。

「……わかつた。三〇分だけね」

会うのも、きつとこれが最後だらうし。  
あたしは二人の正面に向き直つた。

がつしりした一枚板の長テーブルに作り付けの長椅子。詰めれば両側に五人ずつは座れそうな巨大なテーブルをあたしたち三人は贅沢にも占拠している。

研究棟の屋上に出ると頭上に七月のまぶしい晴天が広がつて、寝不足の目を思わず細める。ここからは京都市街が一望できる。今朝の空気は、梅雨明け直後の京都とは思え

「無事に戻ってきて、ヤタを引き取って、そんでもって一行さんと、ちゃんとこの世界でさ」

ふと、思いを馳せる。もしかしたら、無数にある多元宇宙のどこかには、堅書君の隣にあたしがいた世界もあるんだろうか。

この世界は違う。ここは、堅書君と一行さんのための世界だ。彼らが幸せになるために存在する世界だ。あたしはモブ顔のただのエキストラで、それ以上でもそれ以下でもない。それでも。

堅書君。あたしは、堅書君が。

「——幸せになつてみなよ、バーカ」

堅書君も負けじと不敵な笑みをこつちに向けた後、玄関のドアを開けた。雨脚はかな悪態をつきつつ、目一杯笑つて、あたしは堅書君を送り出す。玄関の外に。別の宇宙に。

「ああ、やつてやるさ」

堅書君も負けじと不敵な笑みをこつちに向けた後、玄関のドアを開けた。雨脚はかな

「いや、でもさ、遊びに行つてるつてレベルじゃなくない？ 引つ越しまでしてんでしょう？」

「やっぱ堅書、あいつおかしいわ。普通じゃねーわ。大丈夫なのかよ……」

「私は千古研つて聞いてなんか納得。あの研究室にはマッドな人間が吸い寄せられる何かがあるんだろうねー」

結局、堅書君はやっぱり変だという結論で全会一致して、班の結束がちょっとびり高

まったく気がした。険悪な雰囲気もいつの間にか消えていた。

教室の堅書君の横顔をうつすら思い出す。どこか思い詰めたようなあの横顔を。

「マジで、堅書君つて何考えてんだろうね？ ま、うちら凡人にはわかんないんだろうけどさー」

変人の考へることはわからない。今日の飲み会のそんな結論に満足しながら、あたしは大皿に最後まで残つてた『遠慮のかたまり』に遠慮なく箸を伸ばした。

「堅書君と一行さんが、並んで立つていた。反射的に振り向いた。

学科の学位授与式にもいた堅書君は、普通にダークグレーのスースツに紺系のネクタイ。

一行さんは、落ち着いたグリーンの袴に古典的な梅の柄の小振袖で、髪をアップにしてる。学位記を抱えて桜の下に立つ二人はまるで一枚の絵みたいな完全無欠のカッフルで、ほんの一瞬、思わずあたしは目を奪われた。

すぐに、すべてを思い出して嫌な気分になる。正直、今日この二人には会いたくなかった。二月のあの日からずっと、できるだけ思い出さないようにしていた。

「……何」

思った以上にとげとげしさが声に出てしまつて、そんな自分が余計嫌になる。

「えっと、その……ごめん。本当にごめん。何から謝ればよいかわからないけど、でもどうしてもこのままにしたくなくて」

「……」

今さら何を言い出すんだろって思った。無駄なのに。

「一行さんから話は聞いた。身勝手なことはわかっている。許せなくて当然だ。でもど

にして返してもらうつてことで！」

動物病院の診察券とワクチン接種代を堅書君から預かると、段ボール箱を両手で抱えて廊下に出た。極貧生活を見かねて、ワクチン接種代も出世払いいいよつて言つたけど、堅書君は自分が払うと言つて頑として譲らなかつた。自分は塩パスタなのに、ヤタには結構いいフードをあげてるしさ。そういうところだよね。

でもまあ、ともかく、まだまだヤタのことは堅書君に任せつきりにはなれない。今後さらに忙しくなるだろうし、やっぱり時々はここに様子を見に来る必要があるよね。当面はあたしがいなくちやきつとダメだ。

廊下を歩きながら、段ボール箱の重みに愛おしさを感じる。ヤタが導きの神様つての

は本当なんだなあつてほんやりと思つた。こんなに長く堅書君と話したのは初めてのことだつたし、あたしは堅書君のことをすつかりわかつた気になつていた。

だけど、堅書君は一番大事なことをずつと隠していた。それを知つたのは、卒業を間

話をしてみると、確かに堅書君は思つたほど取つつきにくいやツじやなかつた。口数は少ないし、ちょっとキヨドつてゐるけど、最低限の世間話くらいには乗つてくれる。ただ、いつまでも「ですます」口調を崩さないのでハデ子がキレで「ですます禁止! 使つたら罰金五百円ね!」と宣言してからは、班のメンバー内ではタメ口で話してくれるようになつて、少しは馴染んできたかなと思う。あたしは別にどつちでもいいんだけど。

近に控えたある冬晴れの日のことだつた。

第三章 2034年 冬

(一)

「じゃあね、ヤタ。明日までいい子でお留守番するんだよ」

今日も安アパートのドアをパタンと閉めて、冷え切つた廊下に出る。

堅書君は猛勉強の理由を打ち明けてくれて以来、たまに研究室に泊まり込むときや夕の世話をあたしに頼むようになつた。近くに住んで猫の世話も慣れてて堅書君の事情も知つて、頼みを断れないつてわかつてゐるから。洗いざらい話してくれたのはそれが理由か。ほんととあいつ策士すぎ。完全にあたし、都合のいい女じやん。でもまあ、アルタラセンターの最終入所試験の結果も来月にはわかるらしいし、あたしも卒論をやつと出し終えて一息ついたし、何より二月のこんな寒い日にヤタを放つておけなかつた。

「……猫を飼うつてことは」

ついと堅書君が手を伸ばして、ヤタの小さなおでこを指の腹で撫でた。気持ちよさそくに目を細めるヤタ。

「そういうことにも責任を持つ、つてことだつたよね。だから僕は——絶対に戻る」

立ち上がりつてそう言い切ると堅書君はノートをリュックにしまい、再び左肩にひつかけた。

「そ。やつとわかつた? 猫を飼うつて、そういうことだかんね」

三ヶ月後、ヤタが帰る先は、今の堅書君の家じゃない。堅書君と一行さんの新居だ。

ヤタと一緒に、堅書君の目をしつかりと見すえる。無造作に跳ねた髪を、変わり映え

のしないワイシャツを、こめかみの傷を、記憶に焼き付ける。

「何度も言うけど、ヤタを預かるのは、あくまで一時的なものだから。ちゃんと引き取りに来なかつたら、絶対許さないから」

#### 第四章 2034年 春

(一)

吉田キャンパス本部構内は、いつもと違う華やかな空氣に満たされていた。正面のクスノキの周りは記念撮影をする人達でごつた返している。そぞろ歩く色とりどりの袴姿、一発ネタのコスプレ集団、誇らしげに時計台の前に立つ親子連れ。外部会場での卒業式も学科ごとの学位授与式もひととおり終わつて、みんな思い思いに時間を過ごしている。

喧噪から少し離れて、あたしは工学部のほうに向かつてぶらぶらと歩いて行く。うちの学科はほとんどみんな大学院に進学して、四月以降も桂に居続けるから、卒業といつてもそんなに感慨はない。だけど、四回生の間はまだ時々来ることがあつたこの吉田に来る機会は、滅多になくなる。そう思うと、あたりの建物をなんとなく目に焼き付けておきたくなつた。

総合校舎の手前の大木はもう五分咲きになつてて、青空とのコントラストがすごくきれいだ。スマホをかざして構図をあれこれ試してると、背後から名前を呼ばれ

先生がなぜ別の世界にいるのか、堅書君と何があつたのか、結局あたしは知らない。

「だから今回、僕が覚えている限りの先生の人生を全部、ノートに書き出した。この世

界に先生が確かに存在していたことを、自分なりに記録しておきたいと思った」

堅書君は、背負つたままだつた黒いリュックから水色のノートを取り出して、パラバラとめくつた。中身までは読めなかつたけど、細かい字がびつしりと書き込まれている。「その過程で最近、思い出したんだ。君が助けてくれたのは僕達だけじゃなかつた。僕の先生もまた、かつての君に助けられていたつてことを。いや、違うか。かつて……じゃないな。過去じゃない。だから君だったのかな。ああ。そうか。なるほど」

何やら一人で納得して一人で驚いてる。相変わらず堅書君の話は論理がぶつ飛んで、まるつきりわけがわからない。このぶつ飛び具合があたしは好きだつたんだ、と思う。「ふふ、そうかそうか。じゃ、先生によろしくつて伝えといでよ。で、先生の写真撮つてきて」

「写真、か……。はは、善処するよ」

堅書君は鼻で笑つた。

「なにそれ！ やつぱ全然戻る気ないでしょ！」

がその引き金を引いてしまうことだけは許せなかつた。

何日考え続けても答えは出なかつた。アパートの前まで何度も行つてみたけど、どうしても突入する決心がつかなかつた。

二人を止める勇気がない一方で、黙認もしたくないあたしは、悩んだ末にある卑怯な考えにたどり着いた。これは別に、今日明日どうこうつて話じやない。少なくとも堅書君がアルタラセンターに入るまでは、事態は何も進展しない。

だから目をつぶつて、先送りしよう。今はもう、何も考えたくない。

あたしは、考えるのをやめた。堅書君のこととも一行さんのこととも、ヤタのこととも、心の奥深くに沈めて思い出さないようにした。

季節は容赦なく進み、やがて京都市内にも桜の花がちらほらとほころび始めて、あたしは四年間の大学生活最後の日を迎えた。

「ごめん、昨日の飲み会で堅書君の彼女の話になつてさ」とフォローする。ハデ子と小動物ちゃんも「堅書君の彼女？ 見たい見たーい！」と寄つてくる。

「え、あ、その……」「写真、見せて見せてーー！」

詰め寄られて堅書君も観念したのか、渋々スマホに一枚の写真を表示させた。場所は鴨川の河川敷みたいに見える。意外にも露出度の高い服を着た長髪の女性が立つてゐる。かなり大胆なショルダーカットに、ぴつちりしたショートパンツ。しかも服の中央にスリットがあつて、おへそが丸見えになつてゐる。ちょっとすごいな。こういうのが堅書君の趣味なんだろうか。

……が。

肝心の顔が、よく見えない。かなり引きで撮られて、ポートレートというより風景写真の中にたまたま人が映り込んでる、って感じ。それに彼女さんも、やや顔をそむけ気味だ。髪も、ハーフツインなのかただのロングなのかよくわからない。スタイルもいいし、美人っぽいことは何となくわかるけど、たぶん街で会つても気づかない、これ。

……が。

ハーフツインテール。

——彼女さんだ。堅書君の。

初対面なのに、一発でわかつてしまつた。

「これじゃ、顔わからんくない？ もつとアップの写真ないわけ？」

「堅書君さあ、わざと解像度低い写真出してきたでしょ！ にしても服すつご」

「うおお、俺には見えるぞ！ ハーフツインの美少女が恥じらっている姿が！ 泣きぼくろが神々しい！」

麥T、どういう目をしてんの。そもそもこの粗い画像のどこにそんな情報量が含まれてるっての。

これ以上の写真が出てこないようなので、あたしは質問タイムを開始する。

「エグいねー。うちの大学ってマジ？ 何学部？」

一瞬、間があつた。

「あ……。そ、総合人間学部……」

「総人！ 総人ねー。あー、うん、なるほどー……」

工学部のあたしにとつては文系とも理系ともつかない謎の学部なので、話をどう続けたらいいかわからない。

頼む、堅書、合コン設定してくれ！ と一人懇願してた麥Tを無視して、方向転換する。

沈黙が流れる。彼女さんは軽く会釈すると、不機嫌そうにこちらを見据えて、静かに口を開いた。

「もしかして、堅書さんにご用でしようか」  
逃げられない。観念するしかなかつた。

桂キヤンバスの一角にあるカフェテリア。この時間は人もまばらだ。S e l e n e という、月の名を冠したその食堂で、どういう風の吹き回しか、あたしと彼女さんは向き合つて座つてている。

堅書君のアパートで堅書君の恋人と鉢合わせするなんて、最悪のシチュエーションだつた。堅書君の部屋から出てきたところは見られてないと信じたい。アパートの廊下であたしは、自己紹介しながら必死に弁明した。自分は堅書君と同学科、同学年で、卒論関係の書類を届けに来ただけで、ノックしたけど不在だったんだ、って。前半は嘘は言つてないけど、書類から先は完全な出任せだ。ならば、と彼女さんが部屋を開けようとしてくれるのを、これは本人に直接渡して説明しなきやいけないからとかなんとかでも。

「ほんとに行けんのかな」「行けるさ」「自信満々じゃん」「昔、身をもつて体験したんだ。だからできるつて信じている」「またまたあ！ ヤバいね」「ヤバいな」

い、遙か先にある何かに焦点を結んでいる。

「十年。ヤバいねー」「ヤバいな」

「ほんとに行けんのかな」「行けるさ」

「自信満々じゃん」

「昔、身をもつて体験したんだ。だからできるつて信じてている」「またまたあ！ ヤバいね」「ヤバいな」

もう堅書君には会えないな、と思った。裏切られたつていう気持ちはなかつた。あたしが何もわかつてなかつただけ。あの二人は、あたしの理解の及ばない地平に向かうことを選んだ。それはもう、あたしがどうこうできるものじゃないし、そこにモブの居場所はない。ただそれだけのことだ。

ヤタはどうなるんだろう。

何も知らないヤタ。ぴんと立つた耳を、驚くとまんまるになる瞳を、小さな後頭部を思ひ浮かべる。

堅書君といたつてあの子は幸せになれない。見捨ててはおけない。堅書君の家に突撃

まるで同意したみたいにヤタが小さく鳴くと、へそ天状態で寝そべつた。その首筋をそつとさすつてやりながら、ずっと訊けずにいた質問を堅書君にぶつけてみる。

「あのさ、堅書君がそこまでして会いたい先生つてさ、どんな人なの？ 写真とかないの？」

「何も残つていない。写真の一枚もない。アルタラにも記録されていない」「ふうん、そつか」

気がついたらあつという間に三年の月日が過ぎていた。そして明日、堅書君の秘密の計画がついに始動する。

二人で玄関にしゃがみ込んで、同じ目線の高さでヤタをあやしながら、とりとめのない話を。昔みたく、玄関の數十センチ四方の空間だけがあたしたちの奇妙な緩衝地帯だ。せつかくだし上がってよ、コーヒーや淹れるからさ。そんな言葉を今日もあたしは絶対口に出さないし、堅書君もそれ以上踏み込もうとはしない。

「三ヶ月つて言つても、あつちにそんだけ滞在できるわけじゃないんだよね？」

「うん。三ヶ月の内訳のほとんどは準備とリハーサル、戻ってきた後の回復期間に充てられる。前にも言つたかもだけど、あまり長居してしまうと量子精神と物理脳神経のずれが大きくなりすぎて、再同調できなくなる。だから主観的時間尺度で数時間が滞在の限界だろうな」

「たつた数時間のために三ヶ月かー。ほんとバカだよね」

「三ヶ月どころじゃない。僕にとつては十年だ」

そう言う堅書君の視線はどこか遠くのほうに投げかけられている。あたしには見えな

あたしがずっと見てたものは幻想でしかなかつた。きっと最初から、堅書君はそのつ

もりでいたんだ。それを一行さんが本気で後押しして。もはや世界中の誰も、彼らの

エキセントリックな野望を止められないんだろうなって思つた。一行さんの言葉の端々から感じ取れる二人の絆はそれほどまでに強固で、あたしのささやかな祈りが入り込め余地は一ミリもなさそうだった。

立ち上がってコートを羽織る。バッグを肩にかけて、トレイを手に持ち、背を向ける。

「残されたあたしがどんな思いで、ヤタと生きていくと思つてんの……」

「……行きたいなら勝手に行けば。そんで二人で仲良く勝手に不幸になりなよ」

呪いの言葉を吐いて、あたしは一人、振り返ることなくその場を離れた。一行さんは、追つてこなかつた。

カフエテリアを出ると、冬の日はもう傾きかけていた。コートの襟元をぎゅっと締め、広い坂道を早足で下る。自然と涙が零れた。

「高校の時からなんですよ？　すごいじやん。どういうきつかけ？」

「えっと……。僕と一緒に図書委員をやってて」

「へえ、堅書君、図書委員だったんだ！　うんうん、いかにもやつてそう。休み時間とかいつも難しそうな本読んでるもんね」

「……」

堅書君は心なしか顔が赤くなつてるようにも見える。でも、照れてるのか、怒つてるのか、戸惑つてるのか、よくわからない。

「ねえねえ、総人つて吉田南よしだみなみでしょ？　大学内でしょつちゅう会えるじやん。いい

なー。今日も会つたりした？」

割り込んできた小動物ちゃんは遠恋中なので、心底うらやましそうだ。

「いや……しばらく会つてない」

「しばらくつて……どのくらい？」

「ええと……四週間。いや五週間、かな……」

「はあ？」

あたしがずっと見てたものは幻想でしかなかつた。きっと最初から、堅書君はそのつ

もりでいたんだ。それを一行さんが本気で後押しして。もはや世界中の誰も、彼らの

エキセントリックな野望を止められないんだろうなって思つた。一行さんの言葉の端々から感じ取れる二人の絆はそれほどまでに強固で、あたしのささやかな祈りが入り込め余地は一ミリもなさそうだった。

立ち上がってコートを羽織る。バッグを肩にかけて、トレイを手に持ち、背を向ける。

「残されたあたしがどんな思いで、ヤタと生きていくと思つてんの……」

「……行きたいなら勝手に行けば。そんで二人で仲良く勝手に不幸になりなよ」

呪いの言葉を吐いて、あたしは一人、振り返ることなくその場を離れた。一行さんは、追つてこなかつた。

言つて必死に阻止した。ヤタが出てきてあたしにすりすりして来たらおしまいだ。

その後は完全にテンパつて、何を話したのか正直覚えてない。ただ、彼女さんは堅書君の部屋には結局向かわずに「貴方のことは、堅書さんから伺っています。どこかで少しお話を」なんてめちゃくちゃ怖いことを言い出して、それ以来お互に終始無言でこのカフエテリアまで来てしまつた。何。伺つていますつて何。怖すぎなんですか！

緊張しすぎて味がないチキンカツを口に運びながら、あたしはあらためて正面の女性をそれとなく観察する。

誰がどう見ても完璧な、正統派ヒロイン。前に見た写真はよくわからなかつたけど、实物を見るとなんかこう、オーラが違う。最低限のメイクなのに目鼻立ちは整つて、文句なしに美人の部類。服装は……今日はまともだ。だほつとしたアイボリーのニットに、茶系のロングスカート。普通だけど育ちの良さを感じるのは、やっぱりこのヒロイン顔のせいだろうな。それに比べたらあたしなんて完全に、どこにでもいるモブの造形。情けないくらいに。

だけどこの彼女さん、さつきから、にこりともしない。何を考えんのか全然読めない。寄らば斬るぞつて感じの近寄りがたさを身にまといながら、ずっと押し黙つてきん

あたしがずっと見てたものは幻想でしかなかつた。きっと最初から、堅書君はそのつ

もりでいたんだ。それを一行さんが本気で後押しして。もはや世界中の誰も、彼らの

エキセントリックな野望を止められないんだろうなって思つた。一行さんの言葉の端々から感じ取れる二人の絆はそれほどまでに強固で、あたしのささやかな祈りが入り込め余地は一ミリもなさそうだった。

立ち上がってコートを羽織る。バッグを肩にかけて、トレイを手に持ち、背を向ける。

「残されたあたしがどんな思いで、ヤタと生きていくと思つてんの……」

「……行きたいなら勝手に行けば。そんで二人で仲良く勝手に不幸になりなよ」

呪いの言葉を吐いて、あたしは一人、振り返ることなくその場を離れた。一行さんは、追つてこなかつた。

「なんで!? すぐそこでしょ！ 隣じやん！ なんで会わないので！」

「それ、やばくね？ 俺でもわかるわ」

「私だつて月イチで東京行つてんのに。大丈夫なのそれ？」

「堅書君さ、週一で会つてるって言つてなかつたっけ」

「ああ……あの頃はまだ会えてたんだけど、お互い最近忙しくて」

「送つてない……」

「ヤバいつて。それマジで自然消滅コースだつて」

「えー、彼女のほうも反応ないなら、もう手遅れなんじゃない？」

ダメじやん、全然ダメじやん、つて思つた。六年間も続いたことが奇跡なのかもしねない。というかもしかしたら、もうとつくり終わりを迎えるのかも知れなかつた。

一氣にお通夜ムードになつたところで先生が入つてきて、話はそこで途切れた。演習が終わると堅書君はいつものように秒で教室を出ていった。今から彼女さんに会いに行くとも思えない。例のバスで桂キヤンバスに帰つたんだろうな。

それ以来、堅書君の彼女さんの話はなんとなくタブーになつてしまつた。だつて、怖

明に行つたけど、千古先生はそれはもう楽しげに、  
「直実い、アイディアは抜群に面白いんだけど、それを形にするための経験値はまだまだ足りてないねえ。法に触れない申請書の書き方とか関係各所への根回しとかさ。そういう厄介事は、こつちで巧いことやつとくから。こういう時こそ、上司は利用し尽くさなくつちや」とか、

「これは徐君たちには、当面黙つておいたほうがよさそうだねえ。うん、大丈夫、僕は守秘義務は守るし、君たちが誰の邪魔も受けず自由に研究できるよう、全力を尽くすのがセンター長の役目だからね」

なんてニコニコしてて、やっぱこの先生頭ぶつこんでるなと思つたけど、頼もしさは半端なかつた。別の世界に行けるなんて半信半疑だったあたしも、千古先生の厳しい無茶振りに応えて検証実験が積み重ねられていくのを見てるうちに、少しづつ自信が持てるようになつてきた。

何度もシミュレーションや実験を繰り返して。納得するまで解析を繰り返して。時に壁にぶつかつて。徹夜で議論して。

びらごぼうを食べている。怒つてるんだとしたら怖すぎるし、そうじやないにしても相当然変わり者なんぢやないか、つて気がする。堅書君がまともに思えてくるくらい変だ。ある意味、お似合いのかッフルなのかもしれない。居たたまれなくなつて、あたしから尋ねた。

「ああ、名前をまだお伝えしていませんでした。一行、瑠璃と言います。一行、二行の一行」

「ああ、丁寧だけど、なんていうのかな、予想外にドスの効いた、素つ気ないしゃべり方。相変わらず不機嫌そうな仏頂面のままだ。

「いちぎょう……さん」

「総人の四回生です」

知つてるとおりの情報だ。

「あ、はい。えつと、あたしはさつきも説明したとおり、工学部の四回生で、同学年だから、タメ口で……いつかな」

「……いいですよ」

か、わざわざ堅書君を後押しして不幸に引きずり込もうとしてんの？ そんなんで一行さんは……堅書君の恋人だつて言えるの？」

「堅書さんは、私が絶対に不幸にさせません」

一行さんの返答は完全にあさつての方向を向いてて、怖いくらいに話が通じてなかつた。一瞬でもわかり合えたと思った自分が情けなかつた。もう、絶望と幻滅しか感じない。

「なに一人で堅書君を守つた氣になつてんの？ そんなの全部自己満じやん。別の宇宙なんてあるのかどうかもわかんない、誰も実証できない。そんなもののために二人とも無意味に脳死状態になつて、ただ二人の人生終わるだけじゃん。絶対完璧不幸まつしへらだし」

もう限界だつた。

「ご家族とか、大学のみんなとか、ヤタとか……。残される人達の気持ちも考えてよ！」

一行さんは何も答えなかつた。表情すら変えず、ただ黙つていた。それを見て、もう何を言つても無駄なんだなつて思つた。一行さんにも。そして、堅書君にも。

「ああ。いつもわがままばかりで本当に申し訳ないけど、あらためて頼む。三ヶ月間だけ、ヤタを預かってほしい」

堅書君は深々と頭を下げた。

京斗大を卒業したあたしたちは、それぞれの道に進んだ。堅書君は晴れてアルタラセンターへ。あたしと一行さんはそのまま大学院の修士課程へ。堅書君は業務の傍ら、先生に会いに行くための方法の研究開発を着々と進めていった。アルタラを直接触れるようになって、やれることが格段に増えたらしい。一行さんのナラティブ物理学も、あたしが卒論で使った手法を取り入れて大改造することで、ホラ話から科学の言葉で語れるまでになつた。これでもあたし、かなり頑張つたつて自負してる。未だに、一行さんの領分は完全には理解できていけど。

堅書君のやろうとしてたことは、入所早々、センター長の千古先生にあつさりバレた。千古先生は怒るどころかめっちゃ面白がつて質問攻めしてきただらし。やれ精度が数桁足りないだの安全性評価がなつてないだの、集中砲火を浴びたよ、と愚痴る堅書君はやけに嬉しそうだつた。やっぱドMだ。一度あたしも一緒に、御所の近くのセンターに説

堅書君も頭おかしいけど、一行さんはその何万倍も。どうかしてんんだつてことを。

「…………は!?」

視界がぐにやりと歪むのを感じた。

目の前の彼女が何を言つてのかわからない。全然わからない。人の姿はしてるけれど、人の心を持つてない、理解の及ばないサイコパス。

「何なの？ 何考えてんの!? 一緒に行くつて何？」 一行さんも脳死になつちやうじやん。バカじやないの？ 諦める諦めないとかそういう話じやなくない？ そんであたしにヤタの面倒見ろつて？ どんだけ身勝手なこと言つてるかわかつてんの!?

都合よくヤタを押しつけようと思われたのもショックだつた。頭がぐぢやぐぢやになつて、もはや自分でも何を言つてのかわからぬけど、もう止められなかつた。

「好きな人がバカやろうとしてたら、破滅の道に突き進もうとしてたら、それを全力で止めるのが恋人の役割なんじやないの？ ……あたしだつたら絶対止める。堅書君が好きなら、堅書君に幸せになつてほしいつて思うもん。なんで止めないの？」 それどころ

くて訊けないじやん。あれからどうなつたの、なんてさ。

堅書君はその後もいつも通り、淡々と講義や演習をこなしては、毎日バスで桂に帰つて行つた。課題やレポートは毎回ほぼ完璧で、あたしたち全員、何度助けられたかわからんない。でも、飲み会には何度も誘つても来てくれなかつたし、お昼ご飯もたいてい何かの専門書を読みながらぼつち飯してた。話を振ると一応答えてくれるけど、基本的に空き時間は何かしら勉強したりコーディングしたり英語の論文を読んだりしてて、なんとなく話し掛けづらい雰囲気だつた。しかも演習中の余つた時間にまで、何やら堂々と内職してた。先生やT.A.さんにもバレてたみたいだけど、課題はちゃんとこなしてるので黙認されてるつぽかつた。

なんでそんなに猛勉強してるのか、ほんとに謎だつた。聞いてもうまくはぐらかされ

た。だから、それ以上踏み込めなかつた。

OKしつつ、自分は合わせないんだ。やっぱちょっと変わつてるな。まあ、このままタメ口で行かせてもらうね。こつちも敬語だと完全にあたしが一行さんに怒られてる構図になつちやうから。ここは強氣で行く。

「ありがと。よろしくね、一行さん」

「お気づきでしようが、堅書さんと……交際を、している者です」

一行さんは唐突に彼女宣言してきた。何なんだ。まるでペースがつかめない。とはいえ、ドヤ顔でマウント取つてくる風でもなく、むしろ照れを感じる口調で、ちょっとだけバリアが弱まつた気がした。警戒すべきなのが気を緩めていいのかわからない。それでも、独特な表現をする人だな。

「はあ……それは、どうも」 こちらも意味不明な返しをしてしまう。

「それで、話というのは、堅書さんのことです」

「ひつ」

キラリと光る刃のような言葉に、油断してた背筋が思わず伸びる。これ以上彼に近づかないでもらえますか、とかかな。あるいは、私達結婚するんです、とか。最悪の想像が無限に湧いてくる。

終わり頃だったかな、作業電話も何となく飽きてきたあたりだったと思う。小動物ちゃんが「どうせなら桂キャンパスに行つてみない？」そのほうが堅書君も誘いやすいし」とか言い出して、桂まで行くことになつた。まあ、それはただの口実で、なんとなく夏の遠足気分でみんなとわいわいチチ遠出したかっただけだ。一応事前に、眼鏡君がWi-Fiで堅書君に連絡したんだけど、全然既読がつかない。いつももそうだから、多分ほんとに読んでないんだと思う。だから、実質的にアポ無し突撃するしかなかつた。

変Tが誰から聞き出してきた堅書君の下宿は桂キャンパスの真裏にあつた。いかにも昭和って感じの、今にも倒れそうな安アパート。住所間違えてんじゃねつて言い合いながら部屋のドアをノックすると、ほんとに堅書君が出てきて、眼鏡君ですらびっくりしてた。だけど堅書君はあたしたちの誘いを迷惑そくに速攻断つて、部屋に引っ込んでしまつた。しようがなく、あいつやっぱ変わり者だとか日々に言いながら、五人で桂キャンパスの図書館に行つてそこで課題をやつたり、隣の建物の学生食堂で夕飯を食べてみたりした。でも、みんなだんだん口数が少なくなつていつた。四回生になつたら毎日こんな生活になるのかつてどんよりしてたのはきっと、あたしだけじやなかつたんだと思う。しかも吉田までの連絡バスが結構早い時間になくなることを誰も知らなくて、

「いつも、ありがとうございます」

責められるかと思つたら、無表情とはいえ感謝されて、拍子抜けした。またほんの少し、バリアが弱まつた気がしないでもない。そうであつてほしい。

「ところで、堅書さんがアルタラセンターを目指していることは、ご存じですか」

「いや、なんつーか、この人も話があつちこつち飛びぶね。」

「うん。知つてる。……つて、あ、もしかして合格内定したの？」

てくる。

「はは、やっぱり、いまだに僕よりよほど懷いてるな。あ、これ、当面のフード」

「ありがと。わざわざ桂までごめんねー。雨、大変だつたでしょ」

「いや、センターの車で來たから」

「は？ 社用車でしょ！？ こんなことに使つちやつて大丈夫なの？」

「わりとみんな勝手に使つてるかな。買い物とか、帰省とか」

「アルタラセンターゆるすぎ！」

卒業と同時に堅書君はあの安アパートを引き払つて、今はアルタラセンターのすぐ隣で暮らしている。相変わらず職住接近でワーカホリックなところは変わってないけど、ちゃんとお給料もらうようになつてからは少しはまともな生活になつたみたいだ。そういえばヤタもちよつとだけ太つたかな？

段ボール箱の中にはお気に入りのタオルやおもちゃも転がつてゐる。猫用キャリーにはどうしても入つてくれないので、この段ボール箱は居心地がいいのかおとなしくしてくれるので、ヤタを外出させるとときは結局いつもこれだつた。

「で、明日から三ヶ月？」

「堅書さんから、貴方がいつも猫の面倒を見て下さつてゐる、と聞きました。今日もそれで来てくださつていたのですね」

「ぎゃあ、全部バレてんだけど！ と、とにかく、いろいろと情報を下方修正しよう。堅書「君」なんて馴れ馴れしく呼んだらきっと殺される。あれ、もしかしてさつき廊下で口にしちやつたかな。……うん、まあ、忘れよう。

「あ、ああ、猫ね。そんな、いつもとかじやなくてごくたまーにだけ、ほら、あたしも桂だし、堅書……さん、時々研究室に泊まつたりするからさ、そういうときだけごはんをね。あ、部屋は入つてないよ！ マジで！ 玄関のどこでこはんあげてるだけだから」

「うん。」

「いつも、ありがとうございます」

責められるかと思つたら、無表情とはいえ感謝されて、拍子抜けした。またほんの少し、バリアが弱まつた気がしないでもない。そうであつてほしい。

「ところで、堅書さんがアルタラセンターを目指していることは、ご存じですか」

「いや、なんつーか、この人も話があつちこつち飛びぶね。」

「うん。知つてる。……つて、あ、もしかして合格内定したの？」

わかるよ。だけど一行さん、なんでそれをのうのうと黙つて見てるだけなの？ 自分の言つてる意味わかつてゐる？

「本人はやりたいのかもしれないけどさ、そんなの自殺行為だよ。そこで人生終わっちゃうんだよ！ こんな不幸なことつてないよ。周りの大事な人達、全員置いていこうとしてんじやん。一行さんだつて、もう一度と会えなくなつちやうんだよ？ 一行さんはさ、それでいいわけ？」

「もちろん、そのような事態は可能な限り回避したいと思つてゐます。離心率eが1未満になるような解は探し続けています。ですが、もしどうしても解が見つからず、そしてそれでも堅書さんが諦めず、陥しきに挑むというのであれば」

「一行さんの瞳の奥に、不撓不屈の炎が妖しく揺らめいたように見えた。」

「——私も、諦めません」

狂気に彩られた、炎が。

「その時は、私も堅書さんと一緒に行く、というまでです。——そうなつた暁には堅書さんの猫を、貴方に託したいのです」

「ようやく、あたしは理解した。」

ぐいと身を乗り出して続ける。

(一)

マンションのチャイムが鳴る。インターほんでロックを解除し、ドアを開ける。梅雨

空をバックに、堅書君が大きな段ボール箱を抱えて立っている。

「やつは」

「悪い、遅くなつた。明日の準備に思つたより時間がかかつて」

そう言いながら段ボール箱を上がり框に置く堅書君。上面のフランプを開けると早

速、真ん丸な二つの瞳と目が合つた。

「ヤターノ！」

胴体を持ち上げようとする堅書君より早く、箱からひょいと飛び出して、立てたしつぽを揺らしながら足元に寄つてくる。

「よーしよしよしよし、元気だつたー？ んー、久しぶりだねえ。エグいねえ」

かがんで上半身をわしやわしやする。ヤタは顔をあたしの手に押しつけてすりすりし

結局普通のバスやら阪急やらを乗り継いで帰らなきやいけなくなつて、散々な目にあつた。

「いいえ」「落ちたの!!」

「結果が出るのは来月です。……ですから、今から話すことは、あくまで堅書さんが合格したと仮定しての話になりますが」

完全に翻弄されてあたふたしてこつちを、一行さんがぐいと見据えてくる。

「堅書さんがアルタラセンターに入所後、やろうとしていることについては、どうまで情報をお持ちですか」

「え、えつと……」

たしか堅書君は、先生のことは彼女さんに話してないつて言つてた。だから、黙つて

そのきつかけを作つてくれたのが、ヤタだつたんだ。

おいてあげたほうがいいんだろうな。あれは、あたしと堅書君の秘密だから。

「あー、実はよく知らないんだよね。何かやりたいことはあるみたいだけど」

「……そうですか」

沈黙。

「もう一度、今度はあたしと一行さん、二人で説得しよう。あたし全力で手伝うからさ、何としても止めよう。ね」

それを聞いた一行さんは、少し困ったような表情で、

「いいえ。私は、堅書さんを止めようとは思つていません」

と言つた。

いきなり鉛器でガツンと頭を殴られたような気がした。その言葉の意味を理解するのに、数秒、かかった。

「…………今、なんて？」

「私は起こりうるリスクを説明しただけであつて、最終的には堅書さんが判断すべき」と言つた。

「え？ なんで!?」

止めたいからこの話をしてくれたんじゃないの？」

そりや、堅書君、意地つ張りだし、人の話聞かないし、説得は簡単じやないつてのは

「…………今、なんて？」

「私は起こりうるリスクを説明しただけであつて、最終的には堅書さんが判断すべき」と言つた。

「え？ なんで!?」

止めたいからこの話をしてくれたんじゃないの？」

そりや、堅書君、意地つ張りだし、人の話聞かないし、説得は簡単じやないつてのは

「…………今、なんて？」

「私は起こりうるリスクを説明しただけであつて、最終的には堅書さんが判断すべき」と言つた。

「…………今、なんて？」

「結果が出るのは来月です。……ですから、今から話すことは、あくまで堅書さんが合

格したと仮定しての話になりますが」

完全に翻弄されてあたふたしてこつちを、一行さんがぐいと見据えてくる。

「堅書さんがアルタラセンターに入所後、やろうとしていることについては、どうまで

情報をお持ちですか」

「あー、実はよく知らないんだよね。何かやりたいことはあるみたいだけど」

沈黙。

え、何この間。怖い。何か本格的に怒らせるようなこと言つちやつたかな。怖すぎる。

そのまま一行さんは無言でお茶碗に残つたご飯の最後の一口に箸をつけ、お味噌汁を

「堅書君つ。やつほ」  
ギシギシと軋む安アパートの廊下を歩いていくと、珍しく共同キッチンの前で堅書君と鉢合わせした。

「……何の用」

暑さのせいもあるのか、堅書君は少し不機嫌そうだ。ていうか、この前よりもさらにやつれてるみたいに見える。

「何の用つて、ヤタのワクチン！ もう四週間経つたでしょ？」 堅書君、忙しくて忘れてんじやないかなって

小脇に抱えてきた折畳みの猫用キャリーを持ち上げてみせる。

「……ああ、もう四週間か」

「ほらあ、やっぱ忘てる！」 堅書君、W-i-Zも読んでくれないしさー。来ちゃった方

が早いし」

静かに飲み干した。完全に蛇の生殺し状態。一行さんはお茶を啜つて一息ついてから、ようやく再び口を開いた。

「ならば、なおさらのこと、情報を共有しておかなければ」  
緊張が走る。

「堅書さんの計画については、私なりに調査しました。恐らくですが、真相に近いところまでたどりつけたのではないかと」

怖っ！ 理解のある彼女さんかと思つてたけど、泳がせといで陰で全部把握してるつか。これ、絶対隠し事できないやつじやん。いやあ、堅書君も大変な人を彼女にしちゃつたもんだね。

この様子じや、先生のこともきっとバレてそうだな、とわたしは身構える。

だけど、続く一行さんの言葉は、あたしの予想を遥かに飛び越えてあさつての方向に飛んでいった。

「堅書さんは、おそらく、別の世界に行こうとしています」

「え？ 何？ 世界？ 留学？」

「別の宇宙、という表現のほうが伝わるでしょうか」

「うん。あたしもそう思う」

「彼女とも仲良さそうで、安心した」

「……ん、そだね」

眼鏡君は正面を向いたまま、少し黙つたあと、「……や、それにしてもさ、アルタラ

センターなんてあいつほんとすごいよな。いろんな意味で」と言つた。

「だよねー。マジでうちの学科一番の快挙だし、学部卒で入るつて意味不明だし」

「やっぱさ、変人などころは変わんないな」

「うん。相変わらず、めっちゃ頭おかしい」

「今千古先生を超えそうだよね」

「ふふ、もうとつくに超えてんじゃないかな。普通に」

やっぱり堅書君はどこまで行つてもどんでもない変人で、この先もずっとあたしたちは、それを不夕にいくらでも盛り上がれるんだろうな。そんなことを思った。

「だつて脳死になっちゃうんでしょ？ 何考えてんのか知らないけどさ、やっぱそれ、

「え」

「ですが、それでも堅書さんは計画を諦める気配がありません。むしろより一層、研究に没頭するようになりました」

「……あいつ、バッカじやないの！」

思わず言つてしまつた。確かに最近、研究室に泊まり込む頻度が上がつたなど感じたけど、それは最終試験に向けた追い込みなんだつてばかり思つてた。

「堅書君。マジで何考へてんの？」

戻つて来れないつて、脳死になつちやうつてわかつてて、何でそこまでして先生に会いに行こうとしてんの？」

完全にどうかしてる。恋人である一行さんでさえ止められないなんて、ヤバいくらいの重症だ。

「だからたしでも、一行さんの説得の手助けになれるかもしない。ていうか、もう

それしか道はないと思った。」

ハデ子が前列の一行さんと堅書君の肩を両側からぐつと密着させる。一人の耳に同時に朱が差した。後ろのあたしからはバレバレだ。中学生か。

「はい、チーズ！」

押しくらまんじゅう状態になつて七人の体温を感じながら、みんなで変なポーズで集合写真を撮つた。その場でW i Zにアップしてもらつて、さらにひとしきり盛り上がりた。写真の中の一行さんは相変わらずにこりともしていなかつた。だけど、彼女の色白の頬がちょっとだけ上気するのが、あたしにははつきりとわかつた。

互いに少し別れを惜しんだあと、堅書君と一行さんはお母さんとの待ち合わせ場所であるクスノキのほうに去つて行つた。絵になる二人の背中を見送つてると、あたしの隣にいた眼鏡君も遠ざかる二人を見ながら、「あいつ、またちよつと変わつたな。……いいほうに」

「だね」

「三回生の頃は心配したけどさ。元に戻つたつていうか、むしろ昔より楽しそうになつて、ほんと良かつたよ」

ヤタつていうのは、三月に堅書君が飼い始めた子猫だ。真っ黒で、ちっちゃくて、子猫にしてはすごくおとなしくて、そんでもつてめっちゃ可愛くて、会うたんびにぐんぐん大きくなつてゐるから会いに来るのが楽しいんだよね。堅書君てば、猫の飼い方も知らぬのにヤタを拾つてきて死なせかけて、たまたま実習の忘れ物を届けに来たあたしが見つけて速攻お医者さんに連れてつて、その後もつきつきりであたしが一緒に世話をしたから助かつたんだあって、あたしはヤタの命の恩人なのに、まるで感謝してもらえてない。その後の育ての方も危なつかしいから、こうして時々様子を見に来てる。

名前は堅書君がつけた。子猫用ミルクを数時間おきに飲ませ続けて数日すると、荒れていた毛並みもすっかり良くなつて、カラスの濡れ羽色つていうのかな、真っ黒で艶やかになつて、「つやつやになつたね！ カラスみたい」つてあたしが言つたら堅書君が「名前決めた。ヤタにしよう」つて。ヤタガラスのヤタなんだって。なんか、導きの神様なんだつて言つてた。

ヤタの面倒をしようちゅう見に来れるのも、四回生になつてあたしも桂に引っ越したから。去年だつたら無理ゲーだつたなー。あたしは堅書君とは別の、データサイエンス系の研究室に入つて、今は卒業研究と院試の勉強を同時並行で進めてる。講義や演習は

わつちやつたら何の意味もない。戻つて来れないなんて、そんなの、先生もきっと喜ばないよ。だからさ、何か別のかたちで堅書君の夢を叶えようよ。堅書君が幸せになれる方法は、きっと他にもたくさんあるよ。

「あのさ、一行さん」

「はい」

「ありがとね、教えてくれて」

わざわざ忠告してくれた一行さんに、素直に感謝したいつて思った。

「ね、一行さんさ、早くこの計画を止めよう。堅書さんには悪いけどさ、一行さんから説得すればきっとわかつてもらえるつて」

さすがに、一行さんの説得を聞き入れないほど、堅書君もバカじゃないよね。

「堅書さんを、脳死になんかさせない。そんな不幸な目には絶対に遭わせない。アルタラセンターに入るのは別にいいとしても、少なくともこのまま実行したら何が起きるのか、全部ちゃんと説明すべきつて思うんだ」

「すでに一通りの説明はしました」

「だね」

「三回生の頃は心配したけどさ。元に戻つたつていうか、むしろ昔より楽しそうになつて、ほんと良かつたよ」

「……………はい!?」

「別の、宇宙。」

「何を言つてるんだろうこの人は。」

「この宇宙の外に存在すると予想される別の宇宙、の意です」

一行さんの顔をまじまじと見る。冗談を言つてる顔には見えない。もしかしてスピリチュアルとかそつち系の人なんだろうか。

全然違うよ、堅書君はただ先生に会いたいだけなんだよ、と思わず言いたくなつたけど、そういうえば堅書君、「先生のいる世界に行きたい」つて言い方をしてたのを思い出して、一気に戦慄する。意味不明だった先生の話も、そう考へるといろいろと辯證が合うような気すらしてきて、頭がクラクラしてくる。

「荒唐無稽とお思いでしようが、無理からぬことです。私自身、幾許かの疑念は残つてますから」

てつきり何かの比喩だらうと思つてたけど、百歩譲つて先生が本当にどこか別の「世界」にいる、と堅書君が思い込んで、そこに行こうとしてるんだとしたら。考えたくないけど、一行さんの言うとおり、別の宇宙とやらをほんとに目指してるんだとしたら。

ほとんどなくなつて、基本的に研究室が居場所になるから、学科のみんなでつるむ機会もすっかりなくなつちゃつた。桂での学生生活は思ったほど悪くはなかつたし、研究はそこそこ楽しい。だけど、吉田でのバカ騒ぎが時々無性に懐かしくなつたりもする。

見ると堅書君は、ちょうど瞬間湯沸かし器から両手鍋にお湯を張つてゐとこだつた。部屋のシンクは水しか出ないらしいから、光熱費の節約の一環なんだろうな。お湯の溜まつた鍋を両手で持ち上げて、狭い廊下を歩いていく堅書君の横から、覗き込むようにして話し掛ける。

「なになにー？ 何か作んの？」

堅書君はすぐには答えずに、ちょっとウザそうな顔をする。そのまま開けっぱなしの部屋に戻ると、ドア脇の一口コンロに鍋を置いて点火し、換気扇の紐を引っ張つた。

「ああ、これ。まとめて茹でようかと」

コンロ下の戸棚から出してきたのは、パスタの袋だ。

「お、パスタ？ パスタじゃん！ ほおー、堅書君パスタ作るんだ！ いいじゃん。何味？ カルボナーラ？ ジエノベーゼ？ マンマミーア？ ランボルギーニ？」

堅書君はすぐに答へず、そのまま開けっぱなしの部屋に戻ると、ドア脇の一口コンロに鍋を置いて点火し、換気扇の紐を引っ張つた。

「もう、みんなで写真撮ろうつてずっと探してたんだよ！ 私も堅書君も今日でお別れだしね」

「写真！ いいじゃん！ 撮ろう撮ろう。どこで撮る？」

「んー、七号館の前とかどう？ やつぱ演習つてこのイメージ強いし」

七号館の入口にみんなで陣取る。ふと見ると一行さんは少し離れたところに一人ぼつんと立つていて「撮りましょうか」と手を差し出した。

「じゃーん、自撮り棒あるんだよね！ それより一行さんも一緒に撮ろ！ こつちこつち！」

「……学科の仲間の記念写真なのですから、私が入るのは場違いなのでは」

全員に手招きされて、一行さんは欣然としない表情で堅書君の隣、あたしの斜め前に並んだ。かすかに柑橘系の香りがした。

「もっと寄つて寄つて！」

「はは、そりやそうだな。ほら、一行さんはここ！ 堅書君の隣ね」

全員に手招きされて、一行さんは欣然としない表情で堅書君の隣、あたしの斜め前に並んだ。かすかに柑橘系の香りがした。

「もっと寄つて寄つて！」

——頭おかしい。やっぱり堅書君は完全に頭おかしい。もはやバカとか変人とかそういう次元じゃない。人としてヤバい領域に入りしている。

そしてそんな話を真顔であたしに振つてくる一行さんも、負けないくらいヤバい。だけど、なんとなく頭ごなしに全否定っちゃいけない気はした。背景に堅書君なりの筋の通つた根拠があるんだろう、と思いたかった。同じ学科で学ぶ同士として、科学的思考くらいはまだ捨てないでいてほしいし、そもそも頭脳明晰な彼がスピリチュアルとかにハマるとはとても思えなかつた。

それに——もしも堅書君が完全にただの妄想に取り憑かれてただけだつたら、彼の今までの頑張りは完全に無駄になつちゃうことになる。単なるデータラメのために、すべてを我慢してきたことになる。それはあまりにもすごい。たとえほんの一握りでもそこに真実があつて、堅書君は確かにこの世界の本質を見いだしたのであってほしい。頭では否定しつつも、このめちゃくちゃなホラ話を信じてみたいと思つてしまつて自分があつた。

だいたい、まだ話のイントロすらまともに聞けてない。『別の世界』というのも何か総人独特の言い方とかなのかもだし。早合点はよくない。一行さんは、あたしに、何か

「そつか。……最悪だね、それって」

別の宇宙がどうとかはまだ、信じ切れてない。だけど、ネズミの動画を実際に見てたから、量子精神を切り離したら脳死になるのはほぼ確定なんだろうなつて思つた。だいたい、一度脳死になつてしまつた人を再び蘇らせるのも常識的に考えてもかなり大変に思えたし、ネズミの実験だつて成功率100パーセントってわけじゃないはず。そう考えると、やつぱり堅書君のやろうとしていることはどう見ても、不幸に突き進んでいく自殺行為に思えた。

堅書君がもしこの計画を実行したら、その量子精神は切り離されて、永遠に失われてしまう。残された体は、あのネズミみたいな脳死状態になつてしまつた。先生に会つてほしかつた。だけどその夢は、脳死になつて周りの人達を悲しませてまで叶えるべきものじゃない。堅書君が罪悪感から解放されても、人生がそこで終

「……は、初めまして。一行、です」

たじたじとしてる一行さんに、堅書君はみんなのことを真つ赤になりながら紹介する。

「い、一行さん。こちらは、前にも話しましたけど学科の同級生で——」

あたしたちをぐるりと見回してから続ける。

「僕のことをずっと支えてくれた、その、大切な仲間……なんです」

照れながらもその顔は、何だかとても誇らしげに見えた。

「こら、堅書君さあ、ですます禁止つて言つたでしょー！ 五百円ね！」

「いいんだよこの二人はよお！ 敬語で話すカップルからしか得られない栄養があんだよ！ ぐぬぬ……」

ノリのいいこいつらを見ると、ほんとに変わらないな、きっと十年後もこんな感じなんだろうなって思う。

「ちょっとお、堅書夫妻と三人で今までどこにフケてたの！」

大正レトロな着物に身を包んだ小動物ちゃんがひそひそ声で話し掛けてくる。うちの

学科では珍しい就職組だ。東京の会社だって聞いてる。

「あー、ごめーん。ちょっと積もる話があつてさ」

を量子精神で修復して、ネズミを“生き返らせ”ていた。

ええと、今回は、その逆つてことだよね。つまり、量子精神を物理脳神経から切り離したら、処置を受ける前のネズミみたいになるはず。

動画の冒頭シーンを記憶からたぐり寄せる。仰向けにぐつたりと脱力していたネズミの姿。だらんとした手足、頭から伸びる電極。

吐き気がした。

「待つて。切り離すつてことは……」

「恐らくご想像のとおりです」

「脳死……だよね。体のほうは」

一行さんは頷いた。

「もちろん、量子精神が戻つて来られるのであれば、再び物理脳神経に同調させれば、

原理上は元の状態に戻れるはずです。モデル動物による実験はござ存じですよね」

「うん。講義で見た。脳死したネズミが復活してた」

「ですが、今回のケースでは、そもそも量子精神がこちらに戻つて来られません。つまり、脳死状態の身体だけが残された状態となります」

### 「塩味」

「ちょっとさあ、ツッコミくらい入れてよ！ ……って、え？ いやいや塩味つて！」

当たり前じゃん、塩で茹でるんだから！ ていうか何でボケにボケで返すかなー」

「いや、だから味付けが塩で」

「はあ!? 塩オンリー？ 素パスタ？ 素うどん的な？ 副菜もなし？」

見るとコンロの脇には確かにお皿と塩とお箸しかない。その瞬間、今日もあたしは吼えてしまった。

「何考えてんの！ どんだけ極貧生活してんの！ 死んじやうよ！ 待つてて今パスタソース買つてくるから！ 逃げないでよ！」

扇風機の回る音が部屋に響いている。半開きのドアからは、蒸した空気が廊下に流れ出している。堅書君は畳に座つて、あたしは三和土たたづちで猫用折畳みキャリーにそつと腰掛け、割箸でパスタを食べる。トマトソースとソーセージと野菜で超適当ナポリタン。チーズ入り。共同キッチンの三口コンロで、ちゃんとフライパンで炒めて作ったやつ。

他にも野菜ジュースとか、レトルトカレーとか、サバ缶とか、常温保存できて栄養があ

を教えてくれようとしている。堅書君にまつわる何かを。

「えっと、ちょっとまだ全然ついてけてないけどさ」

すっかり冷えきったお茶を一口飲んでから、あたしは背筋をただして、一行さんの琥珀色の澄んだ瞳を見える。嘘をつけない人の目だ、と感じた。

「とりあえず、最初から順を追つて説明してよ。全然わかんないかもだけど、ちゃんと聞くから」

一行さんの瞳に強い決意の色が見えた。

「——わかりました。お話しすると決めたからには、中途半端はいけません。やつてやりましょう」

長い話になりそうな予感がした。先にヤタの所に寄つておいて本当によかつた、と思つた。

りそうな物もいろいろ買つてきた。パスタのアレンジにも使えるしね。あと、勝手にお相伴させてもらつたぶん、パスタの追加ストックと、ヤタのフード。

「マジで毎日三食、塩パスタだつたの？」

「ああ。塩だけって、けつこう旨いんだ」

「そういう問題じやないでしょ！……壊血病になるよ。ほら、昔、船乗りとかがなつてたやつ。堅書君が倒れたらさ、ヤタはどうなんの」

「……」

「猫を飼うつてのはさ、そういうことにも責任を持つことだかんね」

「……そだな。ありがとう」

あたしが今いる三和土と、ヤタや堅書君のいる六畳間とは、上<sup>かまち</sup>がり框<sup>かまち</sup>で隔たれてる。土足で入れることまではあたしも立ち入らせてもらつてるけど、それはあくまでヤタのお世話のためだ。靴を脱いで上がつたりはしない。別に疑つてるとかじやなくて、「彼女持ち」の男性の部屋にずかずかと上るのはちょっと違うかなって思つてるから。

ていうか、彼女さんと今どうなつてるのか、あれから訊けてない。でも、はつきりしないうちはここまでしか入らないつて、自分で決めてるんだ。そんなこと口には出

「まず、この宇宙がどうやつて開闢したかについては『存じでしようか』といきなりすごい魔球を投げてきた。あやうくデッドボールになるところだつた。とにかくボールを投げ返さなきや、話が続かない。

「え、えーっと……ビッグバンだつけ？ 宇宙論の講義でざつと習つた」

「はい。初期宇宙の微小な量子ゆらぎが、指数関数的にインフレーションを経ることで、現在の宇宙が形作られた、という説が有力です」

言葉を選びながらゆっくりと一行さんは説明を開始する。ああ、別に怒つてるわけじゃなくて、そういうしゃべり方の人なんだ、と気づく。あたしが勝手に怖がりすぎたかも知れない。

「ビッグバン仮説からは、因果律的に関わりを持たない——つまり、観測できない別の宇宙がこの宇宙の外に無数に存在するだろう、と予言されています」

曲がりなりにも講義でやつたから、一応今のところ、現代宇宙論の言葉で語ろうとしているだけはわかつた。だけど、まだ真意は不明だ。警戒しつつも、できるだけ歩み寄ろうと努力する。

「うん。マルチバース、多元宇宙つてやつだよね。あ、さつき言つてた別の世界つて、

喫茶店を出たあたしたちは、再び本部構内を時計台方面に歩いてゆく。堅書君のお母

さんが仕事を早く切り上げて、息子の晴れ姿を見に大学まで来てくれるんだつて。ね、ほら、堅書君。お母さんのためにも絶対戻つて来なきやダメだよ。堅書君はさ、自分がどれだけたくさんの人から大事にされてるのか、無自覚すぎるんだよ。口には出さずに、一行さんと会話に興じる横顔をチラ見する。でも、その幸せそうな表情を見ちゃうと、もう本気で怒る気にはならなかつた。

工学部界隈まで戻つてくると背後から呼びとめられて、その懐かしい声たちにあたしはちょっとだけ、泣きそうになつた。

「おーい、堅書君！ ……つて、あれ？」

「え？ もしかして、もしかしながら、堅書君の彼女さん!?」

「きやー、彼女さんだっ！」

「おおうつ。このお方が、か、堅書の……。うぐうつ……！」

振り向くと、演習の班のみんなが勢揃いしてゐる。

「ども、初めましてつ！ 堅書君にはいつもめつちやお世話になりまくつてます！」

「や、急にすいません。僕ら堅書君と同じ学科で、演習の班が一緒で」

突きつけた。

(三)

「片道切符……。別の世界に行つたきり、戻つて来れないつてこと？」

混乱するあたしに、一行さんは淡々と話を続ける。

「その通りです。もちろん私のほうでも精円解、つまりeが1未満となるような解がないか、探してはいるのですが」

言葉で言われても、まだピンと来ない。

「それってさ、物理的にはどういう状態なわけ？ ていうか全然想像がつかないんだけど、まさか行く時もほんとに宇宙船に乗つてくれわけじゃないんだよね？」

「宇宙船はただの比喩です。まず量子精神を物理脳神経から切り離して、連結していい量子記録データの形にする必要があります」

「量子精神を、切り離す……」

講義で見たネズミの動画を思い出す。あの動画では確か、脳死状態のネズミの脳神経

か——  
え、何？そこで悩んでんの？

「ちょっと待った。そのデータってスペース？」  
「え？」

「まったくもう。内職ばつかで講義聞いてなかつたでしょ。だから言つたじやん、ベン  
キヨしすぎるとバカになつちやうつて」  
初めて、この二人に勝てた、つて思つた。

「——そのへん、あたしの卒論」

二人を送り出し、必ず連れ帰すために、あたしができること。現実サイドに立つあた  
しにしか、できないこと。

修士課程でほんとにやりたいことが、ようやく見つかつた気がした。

(二)

さないし、堅書君も何も言わない。奥行き數十センチのこの空間は自然発生的に生まれ  
た、あたしたちの奇妙な緩衝地帯だ。

「んー、美味しかつたっしょ！ やつぱ夏はトマトだねー」

食べ終わつて横を見ると、堅書君も空になつたお皿を畳の上に置いて、壁にもたれか  
かつている。ま、さすがに洗い物くらいは自分でやつてよね、と思いながらお皿に目を  
やる。……あれ。何か残つてる。

違和感の正体は、きれいに除けられた輪切りのピーマンだった。

「あー！ ちょっと！ 何ピーマンだけ残してんの！ お子様じやん！」  
「うつ……その……」

「全部食べないと、買つてきた物全部持つて帰るから！」

嫌そうにピーマンを口に入れてすぐに水で流し込む堅書君に呆れつつも、意外な一面

「軌道が橿円であれば、一周してまた元のところに戻つてきます。これは、元の宇宙に  
帰還することに相当します」

手書きの橿円に沿つて、ボールペンの先が大きく円を描く。

「ですが、放物線、双曲線の場合、曲線は閉じていません。漸近線に沿つて無限遠方に  
飛び去るしかない。太陽系に進入する恒星間天体のようなものです」

描かれた双曲線の弓なりのカーブを指でたどつてみる。その曲線は紙ナップキンの外側、  
無限の彼方からやつてきて、反対側の端から再び虚空に向けて続いていく。紙ナップキン  
の中には、決して戻つてこない。

「えつと、それつて。もしかして」

認めたくなかった。それが意味するところを考えたくなかつた。一行さんの言葉の続  
きを聞きたくなかつた。

「はい。言い換えると、別の世界への旅路は片道切符になつてしまふ、ということです」

一行さんはあたしの祈りなんかおかまいなしに、そのドライな事実をこちらの脳天に

エキセントリシティ 63

エキセントリシティ 70

エキセントリシティ 29

エキセントリシティ 63

エキセントリシティ 104

もしかしてこれ？」

「はい、私はそう解釈しています。ただし、多元宇宙は決して物理的に実証することは  
できません。私達の宇宙から、他の宇宙を絶対に観測できないからです」

「まあ、そうなるね」

「つまり極端に言うと、ただのお話に等しいわけです。物理学の範疇の外でしか語るこ  
とができるない」

「ん？ ただのお話……？」

「ここで、少し私の専門の話をさせてください。このような、物理学の外側を扱う領域  
が、今の私の研究テーマです。形而上学、メタフィジックスの一分野です。特に、ナラ  
ティブな視点から多元宇宙を記述しようと試みています」

「ナラティブ……？」

「さつき、ただのお話と言いましたが、お話、物語というのは、事象を主観的に記述し  
たものです。事象を客観的に記述する物理学とは対極にあります。つまり、お話の世界  
にすぎない『宇宙の外側』には、客観的な時空間はもはや存在せず、主観的時間と主観  
的空间のみが定義されます」

「ほんとお子様だよ。ヤタもあきれてるってさ。ねえヤタ、お前のご主人様はなんでこんなお子ちゃまなんだろうねえ」

手を伸ばして、ヤタの耳の付け根をこちよこちよする。ヤタは小さく鳴いてあたしの足元にごろんと寝そべる。

「でもさ、ピーマンが苦手でも、パプリカならいけるんじゃないかな？ あれなら苦くないしさ。彩りもきれいだし」

すると堅書君が軽く鼻で笑った。

「何笑つてんの！ 笑うところじゃないでしょ！」

「あ、いや、ごめん。その、つい最近まったく同じことを言われたから……」

「え？ 誰に？」

思わず反射的に訊いてしまった。

「う……、かつ、彼女に……」

あ……。

彼女さんと、ちゃんと続いてたんだ。

「……？？？」

「逆に言えば、主観的な時空間としてであれば、この宇宙の因果律の外側を記述できる可能性があるわけです。これが、私が今研究している物語論的宇宙論の非常に大雑把な説明です。この宇宙の因果的閉包性は、あくまで物理領域に対してのみ規定される経験則でしかなく、ナラティブな領域ではその限りではありません。むしろ、時間も空間も本質はすべて主観的な物語なのであって、これまでの宇宙論では客観的な側面のみが注目されてきたに過ぎ——」

「ちょ、待って待って、ストップ！ ……ごめん、ちょっとマジでわかんない」

辛抱できなくなつて話をさえぎる。何やら変なスイッチが入っちゃつたらしい。物理の話であればまだギリギリついていけたけど、物語がどうとかいうあたりで完全に脱落した。

「すみません。確かに、本題ではありませんでした。ともかく、この宇宙の外ではある事象は主観でしか記述できない、ということだけ覚えていただければ」

一行さんはほんの少し、すまなそうな顔をした、よう見えた。さつきよりは、不機嫌そうな表情の裏に隠された本当の感情を読み取れるようになつてきた、ような気がす

口を変えて橢円も双曲線も選べるようになるつて、ぱっと見、自由度が増えて余計大変になりそなんだけど。……とかさ」

気になる点はまだ大量にあるけど、ひとまずここで止める。堅書君と一行さんは困つたように顔を見合せてる。

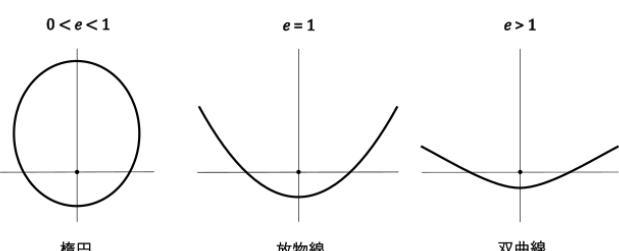
「二人ともすっかり行ける気満々みたいだけど、絶対確実って言えないうちは……まだ許したわけじゃないから。そこんとこ、誤解しないでよね」

「……流石だな。問題はそこなんだ」

ほーらやつぱり。甘いんだよね、詰めが。

「もちろん、やるからには安全な手法を確立せねばと思つてます。戻つてきた量子精神の物理脳神経との再同調については、プロトコールはほぼ確立したといつてい。ただ、その……量子精神データのナラティブ時空間での振る舞いについては、まだまだ知見が足りていない。変数が多すぎる」

「私も四月以降、修士課程で摸索せねばと思つてます。円錐の切断平面の任意性を絞り込むには、量子精神データをナラティブ時空間に対して適切にマッピングせねばなりません。数千兆ものパラメータをどうクラスタリングし、どの次元に射影すればよいの



椭円

放物線

双曲線

何でいつの間にかあたしが二人を助けたみたいになつてんだろ。

「あはははは。いや、ほんとバカだよ、二人ともさ。ベンキヨしすぎて、マジでバカんなつちやつてるつて！」

だって、こんな誰が見たつて主人公級な二人をさ、モブが助けるなんてさ。ありえないと。めちゃくちやじやん。

「正直、全然ついていけないけど、ちょっとでも何かの役に立てたんなら、良かつたよ。でもさ」

ひとしきり笑つたあと、釘を刺す。ほんと、この二人、ほつとくとアクセサル踏みすぎるから、あたしが時々ブレーキかけてあげなきゃなんない。現実に引き戻す役つていう一行さんの見立ても、あながち間違つてないかも知れない。

そしてそれは、自分に刺す釘である。この役を引き受ける限り、あたしは、ヒロインにはなれないってことだ。

ま、知つてたけど。

「戻つて来れるつて言つても、理論上の話じゃん。それにどっちにしても一旦は脳死になつちやうんだよね。そこからほんとに安全に蘇生できるの？　だいたい、円錐の切り

軌道のような一種の道筋が定義できると想像してください。この道筋は一次曲線で近似できるのです

「……はあ」

「ご存じのとおり二次曲線は、離心率 $e$ によってそのかたちが変わります。 $e$ が1より小さいと橢円、 $e = 1$ で放物線、1を超えると双曲線」

一行さんは橢円、放物線、双曲線の図を横に並べて描いていく。高校の頃、数Cで散々やつたつけ。橢円も放物線も双曲線も、実は共通の式で表せて、離心率つていうパラメータの値が違うだけなんだつていうやつ。見た目が全然違うのに実は同じものなんだつて知つたときは、ちょっと面白かったな。

る。

「……とりあえずわかった、ことにする。続けて」

「はい。物理的に別の宇宙に行くことは不可能でも、ナラティブなアクセスであれば可能ではないか、と私は考えています。物語であれば、因果の壁を超えることができる。ここでいう物語とは、客観的・物理的身体ではなく主観的・情報的意識に基づいた手段、すなわち量子精神によるアプローチ、です」

「量子精神……あ」

その単語は、千吉先生の講義で聞いた覚えがあつた。確か、器と中身、という言い方をしていた。量子記録データを利用することで、脳に損傷を負ったネズミが目を覚まして動き出す、っていう動画を見せられたつけ。

「えっと、言いたいのは……量子精神なら、つまりアルタラが使えるなら、別の宇宙といえーい、勝つたね」

「かもしれない」

「ちよつと！　何認めてんの！　知らないよー？　このまま勝ち進んじゃうよ？」自分でもなんかテンションおかしい。言つてることと思つてることがバラバラだ。

「いや……、僕だって好き」のんと彼女を放置してゐるわけじゃない。一時たりとも忘れたことはない

ほらね。だから調子に乗るなつづーの。そりやそうだよね。なんだかんだ言つても、

恋人だもんね。

だとしたら。だとしたらさ。

「——じゃあ、なんで?」

言つてしまつた。ずっと訊きたかった、だけど心の奥底に押し込めていた問ひが、ふ

つふつと湧き上がつてくる。堅書君に突きつけるなら、今しかない、と思う。訊けば

きっと、少しさは樂になれる気がする。

「忙しい忙しいって、何がそんなに忙しいの?」

そんなに恋人のこと放置してたら、つきあつてゐる意味、全然ないじやん。毎日イチャイチャしてゐるほうが、まだ納得できる。もういつそのこと、別れた方が良くない? なんて思つてしまふ。でも、きっとそれは無意味だ。だつて、恋人すらなかなか会わせてもらえないのに、あたしなんかが近寄れるわけがないよね。

う時にこそ行使すべきものであるのに」

言葉の端々に悔しさがにじみ出でている。ああ、一行さんの怒りの矛先はあたしなん

くて、一行さん自身なんだ、と思つた。一行さんはただ、まつすぐあろうとしてるだけなんだ。やると決めたことに対するいつでも真剣で、真摯で、決して諦めない。そのや

り方が時々、ちょっと不器用というか、エキセントリックなだけなんだ。

「しつかりと地に足をつけておられる貴方は、私達にはないものを持つてています。ナラティブ時空間の向こう側を目指す私達にとって、いつでも現実に引き戻してくれる貴方という存在は、最後の命綱たりうのです」

その表情に、もう悔しさは窺えない。

「あの日、貴方の言葉のおかげで、目が覚めました。——ありがとうございます」

不意に、可憐な花のような柔らかな笑みが目の前に広がつた。さつきの動画で堅書君に向けてたのと同じ笑顔だ。こんなのは反則じやん。次の瞬間にはもう仮頂面に戻つてたけど、まるで敵わないなつて思つた。なんかもう意味不明すぎて、一周まわつて笑えてきちゃつた。

「……ふふ」

「十分だと思います。厳密にはアルタラそのものを利用するというより、その派生技術としての量子精神の同調・制御手法をナラティブ時空間に導入する、という方法論を、堅書さんは検討しているようです」

話が飛躍しすぎて半分もわかつてないけど、堅書君がアルタラセンターにこだわる動

機、特に直接アルタラのシステム権限が得られるエンジニア職を狙つてる理由として、

その仮説は確かに符合する気はした。いつだつたか、堅書君が千古先生のさらにつつと先を見ているような気がして空恐ろしくなつたけど、あの直感は正しかつたのかも知れ

ない。

「それでアルタラセンターを目指してたのかー。ま、ほんとに別の宇宙に行けるかどうかは置いといで」

「はい。まだ予備実験で仮説を支持する結果が出でているという程度です。個人的には、眉唾とまでは思いませんが、現時点でのファイージビリティは五分五分ではないかと」

「そりや、そんな簡単に別の宇宙に行けたら世の中ひっくり返るよ」

「ともあれ、成功率自体は今後研究が進めば上がつていくでしょう。ですが、このやり方には致命的な問題がある。最近、私はそれに気づいてしまつたのです」

景気のいいホラ話の雲行きが急に怪しくなつた。

「致命的な問題?」

「はい。猫の面倒を見て下さつてゐる貴方にはどうしてもお伝えしなければと」

「あたしはごくりと睡を飲み込む。『……続けて』

「ナラティブ時空間での量子精神の振る舞いは古典的な二体問題で近似できます。つまり、軌道——という言い方が適切かわかりませんが、別の宇宙にアクセスする際の軌跡は二次曲線で表されます。ですが、どう計算してもその離心率 $e$ が1を超えてしまう。双曲線になつてしまうのです」

ああもう、また一人で暴走してゐる。だけど、致命的な問題つて言われちやつたら、スルーするわけにはいかない。

「はい、ストップ。えつとさ、もう少しかみ砕いてもらえないかなつて」

すると一行さんはボールペンを取り出して、手元にあつた紙ナップキンに何やら描き始めた。

「うんと簡略化します。たとえば地球から月に向かう宇宙船は、天体の重力場の影響を受け、ある軌道を描きます。それと同じように、この宇宙から別の宇宙に向かう際にも、

データは嘘をつかない。

信じてしまつていいんだろうか。堅書君の量子精神データの意味するところを。

「……く」

黙つて聞いていた一行さんの口から、そんな音が小さく漏れ出るのが聞こえた。うつむいて口元をゆがませている。

ヤバい、ガン見し過ぎた。あたしは慌てて堅書君から目を逸らす。も、もしかして、めちゃくちゃお怒りでいらっしゃい……ます、か。

一行さんが顔を上げて、強い視線をこつちに向けた。

「ひっ」

貴方は、私に言つてくださいました。二人ともバカであると。きっと不幸になると意外にもその口調に、少なくとも敵意は感じられなかつた。

ソーサーにコーヒーカップをかちやりと置いて、一行さんは静かに話し始める。

「……おつしやるとおりです。貴方は正しかつた。私も堅書さんも大バカ者です。常に現実より夢物語に、日常より非日常に目が向いてしまう。やつてやろう、と決めたら周りの声も耳に入らなくなつてしまふ。視野狭窄に陥つていきました。想像力とは、こうい

わからぬ。堅書君が、わからない。

「彼女さんもヤタもほつたらかしにして、学科の行事や飲み会も全部すっぽかして、食事だつてこんなに切り詰めて、はやばやと研究室に入つちやつて、休み時間もずっとベンキョしててさ」

学科のみんなもあたしも、どんだけ堅書君のこと心配してると思つてんの。

「院試だつて願書出さなかつたんでしょ。あたし、てつきり千古研にそのまま進むんだと思ってた。だから猛勉強してゐるのかなつて思つてた」

あ、ダメだ、なんか止まらなくなつてる。自分の声が震えている。

「ねえ、堅書君はさ」

気がついたら立ち上がりつていた。ヤタの真ん丸な目がこちらを見上げている。

「そこまで自分を追い詰めて、大学生活全部放り投げて、何をしようとしてるの」

堅書君は一瞬ひるんだように見えたけれど、ゆっくりと口を開いた。

「……どうしても、会つてお礼を言いたい人がいるんだ」

話がまるで見えない。

「え……。どういう意味。それって誰」

バカみたいな返事しかできない。頭の回転が速すぎる人って論理が数段飛ぶっていうけど、これがそれなのかな。

「僕はその人を常に『先生』と呼んでいた」

遠いどこかを見つめながら、ぽつりと堅書君がつぶやいた。その表情は、なんだか不思議と、高校生くらいの男の子に見えた。

(二)

「先生？ ……高校の先生とか？」

話が飛びすぎてついていけない。でもなんか、この話はちゃんと聞かなきやダメな気がした。そう思えるくらい、堅書君はなぜか無防備に見えた。いつも周りに張り巡らされてた見えない防護壁が、今は全然感じられなかつた。

「いや、違う。別に教師だったわけじゃない」

さあ、あたしと同じくそう思い込んでたのかもしれない。  
狂つてるって思った。そんな堅書君に、絶望してた。

でも、あたしは誤解してた。脳死の話を聞いた堅書君が全力を傾けてたのは、負の連鎖を断ち切つて、ヤタの飼い主としてちゃんとここに戻つてくるための研究だつたんだ。「過去の量子精神データでは、量子ゆらぎに埋もれて検出できていなかつた。それがノイズフロアから立ち上がって有意信号として見えてくるようになつたのは、君とヤタに出会つてからだ。僕の量子精神そのものに、何らかの不可逆な変化があつたのだと思

う

——その言い方はすぎるよ、堅書君。

こんな完全モブ顔のただのエキストラでも、堅書君の人生に登場する意味があつたなんてさ。なんかもう、許さないわけにはいかないじやん。あたしを誤解させたことも。死ぬほど心配させて、絶望させたことさうも。

「君もヤタも、現実にちゃんと根を張つて生きている。だから、とつくなつてて、教えてくれたんだね。戻る現実があるからこそ、人は冒険の旅に出られるんだつてことを」